

---

# IS インフィニット・ストラトス～三匹が行く～

シグマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス〜三匹が行く〜

### 【Nコード】

N3418W

### 【作者名】

シグマ

### 【あらすじ】

九鬼大悟、戦闘能力がゲージを振り切れている戦闘狂。織斑一夏、言わずと知れた一級フラグ建築士。五反田弾、フォローに長けた調整役。女性にしか扱えないISを起動させた三人は女子の園IS学園へと通うことになった。しかし、三人は持ち前のノリと戦闘能力でIS学園へと殴りこむ。彼らは人呼んで「IS学園の三馬鹿」。

三馬鹿「」「三羽鳥だって！」「基本的なコメディノリで行きますがところどころシリアスが入る予定です。そして、どこことなく美川べるののネタが入ってきます。」

## 第1話 三匹登場

IS。正式名称『インフィニット・ストラトス』と呼ばれる兵器が現れたのは今から数年前。世界各国の軍事基地にハッキングが仕掛けられ発射されたミサイルを全て撃ち落とし、その威力を恐れた各国空軍による襲撃を退けた『白騎士事件』に置いて一気に世界最強の言葉をほしいままにした。しかし、ISは女性にしか扱えないという事実が発覚してから世界は一気に女尊男卑の傾向が強くなった。しかし、だからと言って男性が裏で権力を持ち続けているのも事実。しかし、民間レベルでは確かにその傾向があつた。そして、様々な事情からISを扱うに相応しい存在を育成するための教育機関が日本に作られた。もっとも、その資金は外交弱者の日本が大国に言いくるめられて全て自費で出すことになつたが。

そして、そのIS学園に三人の男がいる。九鬼大悟、織斑一夏、五反田弾の三人。ISは女性にしか反応しないという常識を打ち破つた三人。あわや某国の研究所行きかと思われたが、下手に働きかけるとまずいということ、IS学園に入れさせその間にゆつくりと処遇を決めるということになった。しかし、その裏にISの生みの親にして世界を相手取るだけの力を持つ篠ノ之束とその協力者である九鬼堅悟の暗躍があつたという者もいる。とにかく、彼らは自分たち以外女子という異界にも等しい学校に通うことになつたのだ。では、その三人はというと。

「……フルハウス」

「甘いな。ストレートフラッシュ」

「勝ったな。ロイヤルストレートフラッシュ」

女子の注目を浴びながらも教室の後方窓側の席を占拠してのんきにポーカーに勤しんでいた。ちなみに、席は本来決まっているのだが、やはり『大人の事情』というものが存在するため、このように固められた席になっっている。本人たちからすれば別に気にしないのだが。

「相変わらず大悟の引きの強さは異常だっ」

そう言って頭を掻くのは織斑一夏。世界最強のIS操縦者である織斑千冬を姉に持つ少年。剣道を習っているため、喧嘩も結構強かったりする。ただし、竹刀か木刀を持っているときに限る。若干、女性からの好意に疎いところはあるがそれはただ単にタイプの女性が姉であるためである。ちなみに、家事スキルは高い。そして、ツッコミ属性である。

「そりゃあな。運が強くなけりゃあ、とっくに親父の修行で死んでたわ」

そう言っつくつくつ笑うのは九鬼大悟。兄は篠ノ之束の協力者でボディガードをしているという九鬼堅悟。大悟自身はその兄の事を憎んでいるが。家が古流武術を伝える家のため、生身の特に徒手

による格闘においては勝てる人間はそういないと言われるほどの才能を持つ兄貴肌の少年で、三人のリーダー的な存在なのだが、なにごん家事能力が低い。得意料理がサバイバル料理という時点で分かってもらえると思う。

「っーか、お前ら。良くこんな状況でポーカーする気になっ たな」

周囲の状況を把握して頂垂れているのは五反田弾。特に有名な家族はいないが、空間把握・認識能力が何故か優れており、ドイツやエアガンなどの腕前は結構高い。そして、大悟とは小学校からの付き合いでキャラが強い大悟と長く一緒に居たせいなのか、フォーロー技術が高い。俗にいう苦勞人である。実家が食堂ということがあり、料理に限るならば一夏をも超える腕前である。

4

そして、弾が言うとおり三人はクラス中の注目を浴びている。ここが普通の学校ならば弾も問題にあげなかった。しかし、ここはIS学園。自分たち以外は全て女子なのだ。なのに目の前の二人は一切気にしていない。

「一々、気にしても仕方が無いだろう。まあ、見られて興奮する性癖があるなら別だが」

「「ねーよ」「」

大悟の言葉にツツコミを入れる二人。何気に息がぴったりな三人である。そして、周りを気にしない三人である。むしろ、周りの生徒たちが気にしている状況である。

「えっと、皆さん。座ってください!」

元気の良い声が聞こえてきた。速攻でトランプを隠した三人は教室の前方を向いた。そこに居たのは。

「ろりきよぬー……Yesだね」

「おい、その変態」

「通報するか?」

「チツ。冗談の通じねえ奴らだ」

大悟がボケればすかさず一夏たちがツツコミを入れる。チームワークは素晴らしいが、ネタにされた方はたまったものではない。

「あああああののののののの!」

「おゝ暴走しとる」

「お前のせいだつての」「

しかし、教師をネタにすれば鉄槌が来るのは当然である。故に。

「何をしとるか貴様ら！」

「げえ、関羽！」 一夏

「げえ、範馬勇次郎！」 大悟

「うわ、千冬さん…って、お前らひどすぎないか!?!」 弾

勿論、出席簿で全員叩かれた。しかし弾には軽く、大悟には角だった。大悟は普通にピンピンしていた。隣の一夏は悶絶していたのに。

「出席簿の角なんざ、ビルの崩落に巻き込まれたときと比べれば軽い軽い」

「そりゃそうだろ」

「九鬼。お前はどんな生活をしてきたんだ？」

大悟の言葉に千冬は頭を抑えていた。どうやら頭痛が出たらしい。一夏はまだ悶絶していた。

「九鬼大悟。特技はサバイバル。趣味は格闘技を習っているから（血の滲む）修行だな」

「……」（何か間があいたような）「……」

ちなみに、大悟は高一ですでに身長180超えの大男である。そのため、自己紹介の時に立つたらちよつと引かれた。

「えつと…五反田弾です。特技は…ダーツとか？ あ、あと実家が食堂なんで料理は得意です。趣味はギター弾いたりするのが好きです。追加で、この九鬼大悟という馬鹿野郎のフォロワー…かな？」

アハハハ」

最後のセリフの後に乾いた笑いをした弾に同情が集まった。大悟は首をかしげている。自覚は余り無いようである。

「えっと…俺は織斑一夏です……（ヤベエ。何言えばいいか分からねえ！）」

周りを見ると千冬はさっさと終わらせると言わんばかりの顔。山田真耶とかいう教師やクラス的女子は何を言うのか期待している。なまじ、前二人が濃い内容だったからハードルが上がっているのだ。そして、一夏は親友たちに助けを求めた。

「（HELP!）」

「（よし来たあ!）」

アイコンタクトで意思疎通が出来るのはさすがは親友同士というべきだろう。ただ、一夏は失念していた。自分たちは基本的にノリで行動していることを。そして、弾は大悟と一夏を弄る際にはフォロワーを入れないということ。

「（いいか？俺らがカンペを作ってやった。その通りにしゃべれ

「！」

「（俺が書いて大悟に渡す。だから基本的には大悟のカンペを見る）」

「（サンキュー！）」

そして、大悟のカンペを見ながら自己紹介を始める。

『俺の名前は織斑一夏です』

「俺の名前は織斑一夏です」

まずは名前から。その意図を理解した一夏は素直にカンペに書かれた文字を読み上げる。

『特技は、家事能力が高いことです。炊事・洗濯とか色々できます』

「特技は、家事能力が高いことです。炊事・洗濯とか色々できます」

これは事実。千冬がない間、大悟や弾が家に入り浸っていたため

必然的に家事能力が高くなった。炊事に関しては弾に教えてもらったりしていた。しかし、一夏にとっての地獄は次のカンペから始まった。

『趣味は、剣道をしていたので体を動かすことと、音楽を聞くことです』

「趣味は、剣道をしていたので体を動かすことと、音楽を聞くことです」

『ついでに、女の子をときめかせるようなセリフを考えることです』

一夏の後ろからそんな書き割りが現れた。注目していた生徒や千冬などの教師は目が点である。それに気づいた一夏が後ろを振り返っても変なモノはない。真後ろには弾がいて大悟にカンペを書いて渡している。右後には大悟がいてその受け取ったカンペを一夏に向けている。何もおかしいところはない。そう思って、再び大悟のカンペを見る。

『後、九鬼大悟と五反田弾とは小学校からの付き合いで、三羽鳥とか呼ばれていました』

「後、九鬼大悟と五反田弾とは小学校からの付き合いで、三羽鳥とか呼ばれていました」

さりげに、三人のチーム名を浸透させようとしたのが丸分かりだが、一夏としても文句はないためそのまま言う。しかし、ふと教室前方のガラスを見た。そこには。

『そして、この二人を舎弟にして中学校ではハーレムを作っていました』

そう書かれたカンペがあった。一夏が慌てて教室を見渡すと、女子がヒソヒソと囁き合っていた。そして、後ろで聞こえたふたり分の「やべ、気づいた」という声。

「お前らアアアアアアアア！ なに虚偽情報流してんの！？」

「え？ これは俺達から見た中学でのお前のフラグ建築ぶりを分かりやすく説明してやるうと」

「ちょっと待てよ弾！ フラグ建築ぶりってなんだよ！？ つーか、ハーレムも築いていないし…なんだよ、この『女の子をときめかせるセリフを考える』って！ コレ完全にナルシストの発想じゃねえか！」

「人間って本当のことを言われると怒るよねえ」

「黙れや、家事能力ゼロ人間！」

いきなりケンカを始めた三人。女子は「あ、この人達はこういう人たちか」と早くも三人の関係等を理解したようである。そして、ヒートアップした三人。

「よし、そこまで言うなら一夏。表に出る」「」

「上等だ！ 二対一でもやってやるよ！」

「ただし俺は出ないけどな」「」

「フザケンナア！」

「貴様ら……いい加減にせんかア！！！」

三人は千冬に鎮圧された。そして、三人は「IS学園の三馬鹿」として認識された。でも、三人とも顔はいいためある意味アイドル扱いだった。

## 第1話 三匹登場（後書き）

独立させました。

そして、修正として弾は大悟に対してのみ苦勞人属性が発動するようにはしました。理由は、一夏をツッコミ役にするため。

## 第2話 学校にて〜一夏イジりは基本らしい〜

三馬鹿がある意味衝撃的デビューを飾った朝のSHRが終わり、授業が始まった。そして、その際の三馬鹿の態度はと言つと。

「楽勝〜楽勝〜」

父親と共に所属している暗部組織『更識』の任務で政財界に潜入任務などもあつたため、必然的に記憶力や理解力を高める必要があつた上に、基本的に天才肌の大悟と。

「……………ん〜」

エアガンなどの弾道計算などで必要であるので理数系ならば得意、それでまあまあ理解できる弾と。

「??????」

勉強よりも主夫業に勤しんでいたため全く理解出来ない一夏。

こんな感じだった。しかも、一夏が古い電話帳と間違えて教本を捨ててしまったことが判明して、千冬が残り二人は如何なのか？と聞いてみたところ。

「え？ あんなもん二日あれば全部覚えられるだろう？」

一言一句間違わずに教本の内容を暗唱してみせた大悟に、クラス中が絶句した。どうやら大悟のイメージは「体力バカ」だったようである。しかし、実際にクラスの女子でもわからないような問題を解いたことで「文武両道、しかしバカ」とイメージが変わるのに時間はかからなかった。

「あ〜えっと…やっぱりまだよくはわかってないです」

それでも、教本は持ってきてあるので千冬は感心している。三馬鹿の中でも一夏を弄らなければ真面目な好青年といえる弾。クラスでのイメージは「基本的にはいい人」である。

「……さて、織斑。どうやらお前だけらしいぞ？」

「アワワワ」

そして、一夏は正直に言うならば現時点では「千冬の弟でイケメン」

くらいの評価しかなかった。キャラのインパクトでいうならば大悟が勝っているし、優しさでいうならばフォローに長けた弾に負けている。現時点では不遇な扱いである。しかも。

「……男のああいう「アワフワフ」って発言どうよ？ 俺は正直キモイ」

「……ノーコメント」

三馬鹿の残り二人がこんな感じなので女子も「ああ。ああいう人なのかな？」という考えになってきている。それなのに、三馬鹿はそれぞれを親友と認識しているため首を傾げる。

「とにかく、織斑。教本を再度熟読しておけ！」

「え、でも」あゝ。俺のやるよ。もう必要ないし」「え？ マジ？」

後ろの大悟から投げ渡されたのは自分たちに配られた教本。教本を全て覚えている大悟にはもう必要ないのだろう。その心遣いに一夏は思わず涙目になった。決して、投げられた教本が後頭部にあたったわけではないのだ。

「ちょっといいか？」

「え？ あ、ああ」

そして、授業も終わり一夏がポニーテールの少女に声をかけられて連れて行かれたのを見た二人は、その後姿を眺めながら口を開いた。

「……告白に昼飯」

「いや、むしろ久しぶりに会った幼馴染との会話に昼飯」

早い話が賭けである。ちなみに、この会話はクラスの女子全てが注目している。やはり気になるのだろう。

「まあ、あの林念仁ならそれが妥当か。んじゃ、次。「私、あなた  
のことが好きです」みたいなコメントを言われるが…気づいている

かどうか」

「気付いていないに百万ドル。つーか、大悟。本当にそう思っているか？」

「賭けにならん」

そう言つて二人は将棋盤を取り出して将棋を始めた。自由にもほどがある。ちなみに、突っかかってきた金髪少女がいたのだが、普通に無視していた。

「……なあ、なんであの子泣いてんの？」

戻ってきた一夏が見たのは机に突っ伏して「これだから男は嫌ですわ〜！」と大泣きしている少女と対応に困っているクラスの女子、そして将棋から花札に移行している大悟と弾だった。

「（。？。）シラネ」

「……いや〜俺も端から喧嘩腰で来る奴のフォローはしないよ？」

「あ〜なんか想像ついたわ」

中学時代も、今はここにいない幼馴染が苛められていると知ったときに、相手が生徒会の女会長であっても殴りこみにいった男と、全ての非が相手にあるように事後処理をした男のコンビ。そりゃあ、初めから見下しているような女子に容赦はしないだろう。自分だつて同じようにするかもしれないのだ。

「そっぴゃあ……クラス対抗戦の代表は次の授業で決めるのかねえ？」

大悟がふと呟いた言葉。一夏と弾は首をかしげた。大悟はそんな二人に冷めた視線を送ったが、なんだかんだで自分のように「まったく理解出来ない状況で活動すること」に慣れていないため仕方ないことだと考え、説明を始めた。

「要するに、クラスの委員長のようなもん？」

「まあ……そう考えてもいいんじゃない？」

「っーか、よくそんなこと知ってんな。それって教本に書いてた？」

弾は教本を読み返してみるが、そのようなことは書いていない。まあ、大悟の話では一々教本にはIS学園関係は概要くらいしか書か

れていないので、一々そんなことは書かれていないとのこと。

「んじゃあ、なんでお前が知ってんの？」

「ツレに聞いた」

そう言っただけで携帯をちらつかせる。大悟の話では、IS学園にいる幼馴染の姉妹に聞いた話だという。

「へー、お前にも俺たちとは違う幼馴染がいたんだ」

「そらそうさ。まあ、幼馴染と言っても夏休みとかに会うくらいの間柄だな」

実際は、妹とは月に数回程会っていたのだが、それをバラすところとばかりに攻撃してくるので黙っておく。下手に騒がれれば、姉のほうで暴走するからだ。

「おっと、織斑先生が来たぜ？」

そして、授業が始まったのだが途中で大悟の予測通りクラス対抗戦代表の話になり、三馬鹿が推薦された。

「はい！ 織斑君がいいと思います」

「え？ 五反田君がいいと思う」

「九鬼君でしょ！」

こんな感じで誰がいいかなどと話が進んでいた。ちなみに、三馬鹿の内一夏と弾は「とりあえず、大悟に回そう」と考えていた。戦闘狂の大悟に回しておけばそれでいいだろうと。しかし、それに待ったをかける声があった。

「お待ちなさい！ そんな事認められるわけがありませんわ！」

それは先ほど大悟たちに無視されて泣いていた金髪の少女。イギリスのIS代表候補生セシリア・オルコット。しかし、勢い良く発言したのはいいが。

「んじゃあ、この四人でトーナメント戦やるか。そうだな…俺と弾、一夏とその女子で戦って勝ったほう同士でまた戦うってことで」

「え？」

「……一週間後にトーナメントを行う。それぞれ準備をしておけ」  
いつの間にか大悟と千冬によりセシリアが口を開くまもなく全てが  
終わっていた。憐れセシリア。もっとも、授業終了後に一夏と弾に  
噛み付いていたが。

「しかし、どういづつもりだ」

「ま、あのまましゃべらせていれば……まあ一夏が堪え切れなくなり  
ますからね」

廊下を歩きながら大悟と千冬は会話をしていた。内容は先程のクラ  
ス対抗戦代表の一件。セシリア・オルコットは典型的な女尊男卑思  
考。つまり、一夏とは相性が悪すぎる。

「一夏って結構キレやすいですからねー」

「……お前の影響だと思うんだが？」

「影響されたのは本人の自業自得だと思いますけどね。まあ、それよりあの糞兄貴から連絡ありました？」

「……相変わらず堅悟の事を嫌っているんだな」

「つーか、これが俺らの『兄弟愛』ですからね。戦って戦ってどっちかが死ぬまで戦う。それが俺らですよ？」

「はあ……堅悟から送られてきた『お前専用IS』だ。名称は『ソウルゲイン』というようだ」

そう言って千冬から渡されたのは指貫の手袋。どつやらこれが待機状態のようである。

「詳しい性能などは教えられていないが……九鬼？」

千冬は黙っている大悟の顔を見た。そこにあったのは心底嬉しそう

な笑顔。

「あの糞兄貴もいい仕事するじゃねえか。いいぜ？ お前の策に乗ってやるよ」

言葉の意味は千冬には分からなかったが、絶対ろくなものではないと感じた。

## 第2話 学校にて〜一夏イジリは基本らしい〜（後書き）

最後のほうで若干伏線があります。

さて、大悟のISはソウルゲインですが、ヴァイロースとかの技も使うかも知れないです。弾は…このままだとラースアングリフかな？ 一夏は白式のままにするかそれとも…？って感じですよ。ご意見お待ちしています。

さて、三馬鹿のヒロインどうしよう。最近、簪も順位を挙げているんだよね。さて、どうすっべ。

### 第3話 学園初夜く別に变な意味ではないく

「だっしやー！」

「うわあ！？」

そこは剣道場。そこで、竹刀を持った一夏と生身で一夏を圧倒している大悟の姿があった。現在、一夏のISが到着していないということどとりあえず体を動かしておこうということとで剣道場を借りて殴り合いを行っていた。傍から見れば、一夏が優勢に見えるだろう。しかし。

「クハハハハハ！ どうしたどうした！？」

「このっ！」

振り下ろされた竹刀を殴り返して、突き出された竹刀を首を傾げるだけで回避する大悟が完全に一夏を圧倒していた。さらに、腹に突きを受けても逆に竹刀が弾き飛ばされるのだから大悟を知らない人間からすれば理解出来ない状況だろう。

「なあ…五反田。九鬼は人間か？」

「名前でいいよ、篝ちゃん。アイツは人間だよ？ただ、鍛え方が並大抵じゃないからね。岩を背負って登山とかしていたらしいからね。下手すればISの体当たりを受けても大丈夫じゃないかな？」

篝は一夏を鍛えるためとここまで連れてきたのだが、いつの間にか大悟と一夏の殴り合いに発展していた。理由としては、途中で大悟と弾がやってきたから。

「オラオラオラオラオラ！」

「ちよっ！速いって！」

ここで、三馬鹿の戦闘能力を説明しておこう。クロスレンジでは大悟が最強である。そもそもが徒手格闘術の家に生まれた大悟にとって武器は己の体なのだ。そして、拳と脚が武器として最も効果を発揮するのはクロスレンジ。

「それに加えて、大悟は何というか…恐怖心つてのが薄いんだよ。だから、目の前に竹刀が飛んできても怖くないから冷静に対処できる。多分、ISを使わない条件下だったら織斑先生ともいい勝負するんじゃないの？体の頑丈さなら大悟が勝ってるし」

その言葉通り、頭部に思い切り突きを食らったのに普通にしている大悟を見て篤は納得した。そういう人間なんだと。

「一夏は……まあ、竹刀を持っているからショートレンジなら結構強いんじゃない？ 大悟には勝てないけど、それ以外なら……自分の土俵に持ち込めばいい勝負できるはず」

大悟には一度も勝ててはいないが、むしろ大悟と戦っているおかげなのかは知らないがどんどん強くなっていつている。調子に乗ると詰めが甘くなるきらいがあるため、微妙なところではあるが、ISに乗ってもそれなりにいい戦いをするだろう。

「お前はどんなんだ？」

「……遠距離戦なら一応一夏を倒せる事もある。大悟に関しては……あんな相手に勝てるだけでも？」

そう言って指さした先には偶然柵の上から落ちてきた鉄球をハイキックで蹴り落とした大悟の姿があった。篤は分かったのだ。恐らく、弾丸などああいいう風に無力化するのだと。そして、それは正解である。

そして、弾は一夏相手ならば懐に入り込まれる前に弾幕を張れば勝

てることがある。というよりも、弾は自分が戦うよりも誰かのサポートを行うほうが得意なのだ。

「ま、そういう事で俺ら三人のバランスは取れているのさ。そうじやなきや、三羽鳥なんて呼ばれてはいないよ」

そう言っ立った弾はそのまま気絶している一夏とそれを担いでいる大悟の下へ歩いていき、千冬たちから呼び出しを受けていることを告げると、そのまま三人で剣道場を後にした。

「……羨ましい」

この三人は自分たちしか同性がないからだけではなく、昔から三人で行動していた親友グループ。そのため、何も言わなくても分かり合っている節がある。だからこそ、篤にはそれが羨ましい。

「俺達の部屋ですか」

「はい。えっと…実は、いろんな事情のため三人とも同じ部屋になりました」

「「「むしろ当然では？」」」

三人とも自分たちが一箇所にかためられる事を予想していた。そりゃあ、思春期の女子と一緒にするわけはない。一夏だけなら千冬の部屋に住ませたかも知れないが。

「とりあえず、三人の部屋はここです！」

「部屋の大きさは同じなのね」

「つーか、雑魚寝でいいだろ」

「とりあえず、荷物おくべ」

「あ、あれ〜？」

普通に部屋に入った三馬鹿に取り残された真耶はその扱いの悪さに泣いた。

「とりあえず、サンドバックはここに置くとして…こっちは腹筋用台座…こっちはダンベル、と。そっちはどうよ」

「俺はダーツセットをこっちに置いて…OK。一夏は？」

「素振り用の木刀はこっちでいいし…あ、配置終わったぞ」

備え付けのベッドは全て分解して部屋の隅に放置して、布団は適当に敷く。

「飯〜飯〜」

「茶碗を叩くな！」

そして、夕食は弾が作りそれを食べて一息つくと。

「そついや、俺がない間にあの金髪嬢ちゃんとなんかあったのか？」

お茶を飲みながら放課後にあつたことを聞くと結構不満が返ってきた。主に一夏。内容としては、男だからなど見下す様が中学の生徒会長を思い出してしまうだの、売り言葉に買い言葉で色々言ってしまったなど。

「相変わらず空気を読むことを知らん奴だな。それと、何でも正直に言えばいいってもんじゃ無いぞ？ そんなだから俺達にいじられるんだよ」

「関係なくね？」

「いや、大悟の言うことは正しい。そもそも『代表候補生』の字面である程度想像付くだろ？ 千冬さんだってかつては日本代表だったんだ。代表つてのが『モンド・グロツソ』に出場していたんだから、その候補生ってくらい分かるだろ？」

弾の指摘で言葉につまる一夏。そもそも、一夏はこの二人に口撃で勝てた試しがないのだ。普段は脳筋ぱいくせに実はこの中で誰よりも口が達者で特に『煽り』に関してはプロ並みの実力者の大悟。フォローをするということはその人間のダメな所も把握しているた

め、ある意味最もやり辛い弾。

この二人に一夏が勝てるかと言われれば否である。そもそも三人の力関係はこんな感じ。

大悟⇨弾>〔時と場合とその他もろもろで変化する壁〕>一夏

こんな感じである。ちなみに、これは中学の時の幼馴染の少女につけられた男としての順位であり、生活能力ならば壁の位置が大悟と弾の間に移動し、それがマリアナ海溝よりも深い溝になり、等号が「⇨」から「>」に変化した上で全ての不等号が逆転する。総合的に考えるならば三すくみである。

「とりあえずは、一週間後の戦闘までにやれるだけのことはしておけ」

「ISもないのにどうしろと？　つーか、それならお前らだって同じじゃね？」

「俺と弾は正直出来レースでもいいし。それに、俺らの中で誰が一位とか決めても仕方ないだろ」

「……この中で最強の奴が何を言う。というか、お前の言い方だと俺がオルコットと戦うことになってるぞ？」

「それは、大悟が千冬さんに持ちかけた結果だな。んで、俺と大悟が戦うってこと。まあ、確実に大悟が勝つけどな。つーわけで、お前のほうが重要だってこと。お前だってあんな事言われたら腹立つだろ？ 大悟はお前の事も考えて提案したんだよ」

一夏とセシリアを戦わせる理由として、弾は一夏に自信をつけさせるものだと思っていた。良くも悪くも一夏は『織斑千冬の弟』として見られている。だから一夏が望まずともそのフィルターがかかる。だから、それに負けないように大悟が気を効かせたのだと思っていた。

「いや、そんな目的不是吗？ ただ、そのほうが面白そうだったから（フラグ的な意味で）」

「「待てこらあ！」」

なにもかも台無しな男である。

「んじゃ、一夏。俺はオルコットの情報を集めておくから…お前は適当に鍛えとけ。箒ちゃんと剣道やっとかのも良い訓練だと思っぞ？」

「まあ、やっとかけど。情報集めって？」

「ま、俺の幼馴染に協力してもらおうかな、と」

携帯を取り出してメールを打ち始める大悟。

「ま、遅くとも明後日くらいには調べてくれるか？ いや、その前に一回会つとかないとダメか……っ！ つか、どうせあのシスコンが監視しているんだろっけど」

ブツブツ言いながらメールを打つ大悟を見て、そして送り先の『更識簪』という名前を見て二人は思った。

「（あれ？もしかして、こいつの弱み握れるんじゃない？）」「」

なにやら波乱の予感。

### 第3話 学園初夜（別に変な意味ではない）（後書き）

早くキャラで揃わねえかな…はっちゃけたい。

とりあえず、こんな感じで進んでいきますが、頑張つてコメディを多くしたいです。そして、作者はみかべる作品にハマっているのでネタとかをそこから持つてくる必要があります。面白いよねみかべる。

とりあえず、三馬鹿のISは「スパロボA」の機体でかためることにしました。大悟はソウルゲイン、一夏はヴァイサーガ（白色）、弾はラーズアングリフということ。

PS・台風がもうそこまで来ている……といつても、外見ても普通の雨っばい。まあ、これから強くなるのかも知れないけど。

#### 第4話 幼なじみとの再開〜メタネタのやり過ぎには注意〜

「よ！ 久しぶりだな簪。最後にあっただのは……2月だったか？」

「うん。大悟も元気そうだね……」

更識簪はある人物を今か今かと待っていた。彼女にとって待ち人は「ヒーロー」なのだ。テレビの特撮番組から出てきたと言わんばかりの戦闘能力に、かつて家の仕事で危険に陥ったときに大怪我をしながらも自分を守ってくれた待ち人。その待ち人と久しぶりに会うのだ。とてもわくわくして眠れなかった。

「『更識』の方には顔を出していなかったけど……変わったことあったか？」

「何も無いよ」

「そうか。あゝ早速で悪いんだが……『セシリア・オルコット』のISについて調べて欲しい」

「……なんで？」

「怒るなって。実は」

大悟は包み隠さず全てを話した。一夏がセシリアと戦うことになった。色々な事情から勝てないまでも『ギリギリで負ける』くらいには鍛えあげないといけないことになった。そのために情報が欲しい。だから簪に頼みたい。

それらをすべて話すと簪は暫く考え込んだ後にそのお願いを了承した。

「今度買い物に付き合って」

「分かったよ。つーか、それだけでいいのか？ 下手すればお前の今後も怪しいんだ。俺にできることがあるなら」それでいいから」

本人が構わないと言っているのでこれ以上口をはさむのはやめておく大悟。

「それじゃあ…日常生活とかで困ったことがあれば言えよ？ 俺にできることなら何でもしてやるから」

「……じゃあ……明日、ここにきて」

そう言って渡されたのは学園内の地図。そして、その地図には赤い丸印がつけられている部屋がある。

「……って整備室じゃ…あ、まさか打鉄式か？」

「うん……手伝ってくれる？」

身長180超えの大悟を見上げて首を傾げる簪。大悟はその頭を撫でながら思った。

「（……ヤベエ、かーいいいよー おっ持ち帰りい）」

どこまでもノリで行く男だった。まあ、そんな冗談は放っておいて大悟は簪の申し出を快く引き受けて、今日のところは分かれることになった。そして、部屋に戻る途中で立ち止まると物陰に視線を向けた。そこには。

「妬ましい……ああ妬ましい……オロローン！」

「姐さん。アンター応美少女なんだからホラー映画のクリーチャーみたいな顔面崩壊させない」

何も知らない者からすれば、話題の男子の一人を物陰から覗いている純情少女に見えるのだろう。目から血涙、口からは呪詛、手を当てているコンクリートの壁には握力で罅が入っているというこの状況を知らなければ。

「だ〜いごくん？ 羨ましいじゃない〜。お姉ちゃん……あまりの怒りでなんか水蒸気爆発を起こしたい気分だな〜」

「……やってもいいけど俺は『その程度』じゃあ死にませんぜ？」

ニコニコと笑う更識楯無。簪の姉でIS学園の生徒会長であり、大悟が所属している対暗部組織『更識』の頭首である。しかし、それ以上に妹の簪を溺愛するシスコンでもある。

「ちくしょう！ 大体、2月以来こっちに顔を出してないくせに！ 任務だけ受けるって何様さ！ 大体、かんちゃんに頼られるなんて生意気だぁ！」

「ちょっと待てい。結局は嫉妬かい！」

「当たり前さあ！ あんなに可愛いかんちゃんに好かれているなんて……ちくしょう！」

「そもそも、アンタが簪から避けられているのはアンタが「なんでもできる姉って格好いいよね!」とか調子乗った結果だろうが!」

「だ、だって姉として妹には格好いい姿を」

シスコンであるがゆえ簪と仲の良い大悟に嫉妬しているのだが、大悟から言わせてもらえば小学生の時に「格好いいお姉ちゃんがいいってこの漫画に載ってた!」といかにも子どもらしい発想で頑張った結果「お姉ちゃんは完璧なんだ!それに比べて私は!」と思わせってしまった上に、フォローを入れなかつた楯無の責任だと言いたい。

「なんで大ちゃんも私と同じようになんでもできるのに仲いいのよ! 不公平だあ!」

「いや、俺の場合は基本ノリで行動しているからそれで相殺されているさ。それにフォローも入れているし」

「チキショー! 大ちゃんなんて……ラブコメ拗らせて刺されちまえばいいんだー! かんちゃん以外で……ウワン!」

捨て台詞を吐いてどこかへ走り去っていった楯無を見ながら大悟は懐から棒付きキャンディを取り出し啜えると大きく息を吐いた。

「……とりあえず、そのフラグは一夏に移譲するか……さて、弾。素直に出てくれば許してやるぞ?」

「しーましえん」

草むらから出てきたのは弾。どうやら尾行していたようである。

「一夏は?」

「篝ちゃんとラブラブ剣道特訓」

つまりは、剣道の打ち合いをしているのだろう。そして、暇になった弾が自分をつけてきたということ。

「しかし……どっちがお前の本命なの?」

「ん? 簪」

「……即答かい」

なんてこと無いようにいつてのけた大悟に呆れた弾だった。

「とりあえず、剣道場いつて一夏を弄るぞ」

「おk」

これ以上この話題をしても不毛なので一夏弄りを優先させることにした二人。鬼畜である。

「よーす一夏に箒ちゃん。差し入れ持ってきた……ぞ」

「大悟どうし……た」

「だ、大悟に弾……これは、その……」

二人が売店で飲み物を買ってきて剣道場に入るとそこには箒を押し倒している一夏の姿があった。

「……さーて、通報通報」

「千冬さんに報告してくるか」

「ちょっと待って!」

「あつあつ」

携帯を取り出す大悟に職員室に向かおうとする弾。そんな二人を止めようとする一夏。そして、顔を真っ赤にしている箒。

「ちょっと待ってこれは偶然だって!」

「ああ!?! ラッキースケベ野郎は全員そついうんだよ!」

「えーっと…千冬さんの携帯番号は…」やめてくれー!」「チッ」

大悟たちにも真相は分かっている。どうせ、こけて押し倒したのが真相だろう。しかしだからこそ徹底的に弄るのだ。普段からフラグを建築している上にそれを自覚していないこの鈍感唐変木男を合法的にフルモッコにする機会をこの二人が逃すはずもない。これで友情が維持されているのだから不思議である。

#### 第4話 幼なじみとの再開〜メタネタのやり過ぎには注意〜（後書き）

さて、更識姉妹が結構早めに登場。特に簪はこれからもレギュラーになるでしょう。そして、簪は四組ではなく二組にしておこう。

そして、次回はちょっと中二的シリアスが入るよ！

修正：弾と鈴のフラグを消滅させました。理由としては…まあ、色々。期待していた方は申し訳ないです。

## 第5話 作戦会議、少しネタを抑えめ

「俺がツレに集めてもらった情報を発表する。ということ、そのツレを連れてきた。名前は更識簪。クラスは隣の二組だ。さて、弾は全員分のお茶を用意してくれ。篝ちゃんはこの資料をそれぞれに配ってくれ。一夏は死ね」

「最後おかしい！」

ここは三馬鹿の部屋。部屋は結構広いため、勝手に引き戸をつけて自分たちの寝床をかくして、しっかりと来客用にちゃぶ台などを設置しているあたり生活臭がにじみ出ている。ぶっちゃけると、他の生徒の部屋は高級ホテルのようだが、三馬鹿の部屋はアパートの一室なのだ。どこから持ち込んだのか畳も用意されている。鼻屑目に見れば高級旅館に見えなくもない。あくまで鼻屑目である。

そして、ここに集められたのは三馬鹿と篝に簪。そして、大悟が仕切り始める。最も、三馬鹿のリーダーでもある大悟の仕切り能力はそこそこ高いため誰も文句は言わない。暴走しなければ、だが。

「さて、簪に調べてもらった結果を発表していく。全員、手元の資料の見て欲しい」

「……ちよい待ち。表紙が『サルでもわかるセシリア・オルコットの赤本』これを読めば貴方も彼女をフルボッコ〜』って……どういうこっちゃん」

机の上に裏返しされていた資料の表紙を見た弾のツッコミに全員が一斉に資料を見る。そこには二頭身の一夏が同じく二頭身のセシリアと対峙している絵が書かれていた。

「……これはお前が書いたのか？」

「フツ。箒ちゃん。俺は…基本的にノリで生きている。面白ければそれでいいじゃない」

つまり、この絵は大悟が書いたのだ。プロの漫画家と比べれば見劣りはするが、同人誌でも書けば売れそうな絵柄ではある。実に多芸である。

「な、なあ箒ちゃん。大悟って…その……昔からこんなだった？」

「うん」

自己紹介の時に大悟とは幼稚園からの付き合いだという箒の言葉は何よりも説得力があった。しかし、実際に内容に入ると箒が集めた

という情報を初心者の一夏にも分かりやすくまとめて説明している。

「す、すごいな」

「大悟のやつ……真面目にしているときは凄いなだが…ボケに走るとなあ」

一夏の呟きに弾がものすごく頷いた。これは一夏と弾だけではなく、中学時代の友人一同の共通見解である。真面目にしていれば、友情に篤い熱血漢のイケメンのだが、その評価をマイナスにするほどのボケをこの男はするのだ。まあ、一部では「漢の夢を現実にする漢」と人気だったが。

「とにかく、オルコットのIS『ブルー・ティアーズ』は遠距離戦に特化した機体だ。そして、その機体名の由来となった自立移動…まあ、ファンネルとかビットだな。それが厄介でもある」

「なんで?」

「一夏よお…お前、真後ろから撃たれて避けられんの? ほれ、この図を見る」

「あ、そういう事が」

一夏の疑問にホワイトボードに分かりやすく図を書いた大悟。一夏もそれで気づいたようだ。しかし、ここで疑問が残る。

「なあ、懐に入り込めば有利なのは分かったけどさ。結構難しいじゃないか？ その…アニメでもビットと同時にビームライフル撃つたりしてたし」

一夏の疑問。それは、そのビット型の兵器とレーザーライフルを同時に使われれば懐に入り込めないのでは？というもの。

「銃火器に関しては分からん。弾、そこら辺どうなの？」

「うん。ISの武装なんて知らないからな。ただ、ビットと手持ち兵器を同時に扱うのは難しいと思う。両手に拳銃を持って反対方向から同時に飛来する標的を撃つとなるとISのハイパーセンサーだっけ？ それで強化された視覚でも無理だと思う。多分、体が硬直するんじゃないか？」

大悟が話を振ってきたのでそれに弾は自身の経験などから答える。弾も空間把握・認識能力は高く、撃ち出したBB弾にもう一度BB弾を当てて意図的に跳弾を作り出すことができるが、分割思考というのは実際問題として難しすぎるのだ。

「私もそれは無理だと思う。ビットを操ればそっちに掛かり切りになつて自分の体は動かせないはず」

そして、この中で一番ISと触れ合っているだろう簪の指摘を受けて決着がついた。

「要するに…ビットの雨をくぐり抜けて一太刀浴びせるってこと？」

「そういう事だ。まあ、ISが来ていない以上はとにかく剣の腕を磨いておけ。篝ちゃん、そこら辺は任せた」

「あ、ああ。分かった」

そして、この話し合いで決まったことはとにかく『一撃必殺』を心がける事。ISが手元にならない以上はこれしか無いのだ。

「んじゃ、ありがとな。お前のおかげで助かったよ」

「……うん。その……私も楽しかったから」

簪は『完璧すぎる姉』の影響で思考が若干ネガティブなので、他人と触れ合うことも余り無い。そんな簪を外に連れ出していたのが大悟。今回も、あの話し合いが終わった後にトランプなどで遊んでいた。

「少しは肩の力も抜けただろ？ お前が姐さんを超えるために作っている打鉄式。それを完成させるには一人じゃ無理だ。俺やあいつらを頼れ」

「……うん。でも、まだ……」

簪は姉がたった一人で専用機を創り上げたことを知っているため、自分も一人で専用機を創り上げようとしている。だが、大悟から見た簪は破裂寸前の風船というイメージだった。

「（立派すぎる姉を持つと苦労するな）」

さらに言うならば、簪は人見知りの気がある。だから知り合い以外に頼ることもしない。だから、こつやって連れだそうとしている。

「ま、そこはまだいいさ。でも、少しずつでいいから俺たちを頼れ」

「……分かった」

「よし、それじゃ「ねえ、大悟」ん？」

簪を部屋まで送り届けて帰ろうと踵を返した大悟は、声をかけられ振り返った。振り返った先には簪の笑顔があった。

「ありがとう」

「……はいよ」

大悟も笑顔で手を降った。

大悟はいい気分のまま自分の部屋へと歩いて行くが、突然鳴った携帯のディスプレイを見ると先程までの雰囲気など掻き消えたかのようになり冷徹な空気を纏った。

『久しぶりだな。大悟』

「ハッ。糞兄貴か…なんだ？ ISなら届いたぞ」

電話口から聞こえてきたのは大悟の実際の兄堅悟の声。

『嫌われたものだな。私はお前のことを愛しているというのに』

「弟を愛している兄は、自分の弟を『最強』にしようとは思わないはずだが？」

『弟を強くしたい兄の愛だよ』

傍から見れば反抗期の弟と世話焼きの兄だろう。

「兄の愛つてのは……弟を強くするという大義名分があれば、テロ屋を援助することも厭わんのか？」

「だが、そのおかげでお前は『更識』でも重要な地位にいる。中々いないぞ？ 『更識楯無』の許嫁候補の一人にその年で名前が上がつているのは」

「俺は頼んじやいないし、姐さんの夫になるつもりもない。テメエの都合で考えるな」

そこまでお前を強くするのは苦労したと語る堅悟。しかし、大悟の顔は怒りに染まっていた。この男は自分を『強く』するためならばどうなるかと構わないのだ。コレこそが大悟が兄を蛇蝎のごとく嫌う理由。

「……俺たちにISを送ってきたのも『強く』するためか？」

『勿論だ。織斑一夏に関しては、束の意向もあつた。五反田弾に関しては、それもお前の成長のために必要と判断したからだ』

一夏に関しては予想していた。弾に関してもある程度予想していた。そうではなくては、一夏はともかく弾まで巻き込まれる事はいかならぬ。

『もっと強くなってくれ。そして、私と戦ってくれ。同程度の存在がないというのはひどくつまらないんだ』

「……ハッ。いいぜ。そこで待っている。テメエが作ったソウルゲインでその場所から引きずり下ろして豚箱に送り込んでやるよ」

『使えるものはどのようなものでも使う。さすがは私の弟だ。楽しみにしている』

それは到底兄弟の会話とは思えない。だが、これでも分かり合っているのだらう。

第5話 作戦会議〜少しネタを抑えめ〜（後書き）

とりあえず、大悟の兄は束と同類の人間。ただし、束より積極的なので性質が悪い。そして、大悟はそんな兄を蛇蝎のごとく憎んでいる。でも、対抗するには兄の作ったISを使うしか無いので自己嫌悪。

次回は、一夏対セシリア。お楽しみに。ネタは代表決定戦が終われば……

## 第6話 VSセシリア〜一夏は若干熱血〜

今日は、いよいよクラス対抗戦の代表を決める模擬戦の日。そして、観客席にはスーツを着込んで付け髭をつけた大悟とこちらもスーツを着ている弾の姿があった。周りはその二人に注目していた。多分、漫画なら後頭部に汗が書かれている。

「はい！ やってまいりました決闘の日！ 実況は私『とりあえず、邪魔なら全て壊せばいいじゃね？』がモットーの九鬼大悟がお送りいたします。 イギリス淑女セシリア・オルコットが勝つのか、一級フラグ建築士織斑一夏が勝つのか！ それは私には分かりませんが、さて、解説の五反田さん。この戦いどちらが優位でしょうか？」

「そうですね。オルコットさんのISは完全に射撃戦に特化した機体のようです。どうやって懐に入り込むのが勝利の鍵ですね。ちなみに、九鬼さん。貴方どちらに賭けました？」

「勿論：オルコットさんですね。織斑選手は最後の最後で失敗する人ですから」

どうやらこれもボケらしい。尤も、すぐに千冬の出席簿アタックを受けて沈没したが。

「なんだろう。俺が行かなければならない気がしてならない。主にツッコミ的な意味で」

一夏はそうぼやいていた。基本的に、大悟がボケると一夏がツッコミを入れるため、いつしか大悟がボケているのをその場にいないでも察知できるようになったのだ。

「いや、お前はこれから戦闘だろう？　まだ、ISが届いていないようだが」

箒はすでに大悟たちの事は諦めた。一々考えていたら疲れるからだ。そしてそんなことを考えていると真耶が駆けこんできた。

「織斑君のISが来ました！」

そして、真耶の案内で格納庫に足を踏み入れるとそこには鎧武者が鎮座していた。

「えっと…織斑君専用IS『ヴァイサーガ』だそうです」

これこそ一夏の専用機ヴァイサーガ。背中にはマント、両腰には二振りの刀。それぞれ『雪片弐型』『五大剣』と彫られている。

「ヴァイサーガ」

一夏はヴァイサーガを見上げて呟いた。すると、千冬が後ろから出席簿でポンと一夏の頭に当てた。

「ボサツとするな。フィッティングなどは実戦で済ませろ」

「OK……って筈。大丈夫だよ…なれない状況での喧嘩は大悟たちと生活していた中でたくさんあったから」

ヴァイサーガを装着した一夏は心配そうに見上げる筈にそう言ってサムズアップを行い、カタパルトに脚を乗せた。

「よし……行くぜ！」

一夏の言葉と共にヴァイサーガは空に飛び出した。

「……ヴァイサーガ、か」

「え？ 大悟、お前あのISのこと知ってんのか？」

観客席で麦わら帽子に団扇、左手には缶ジュースというどこぞの球場にでもいそうな格好の大悟の眩きに弾が反応し、またやってきた筈も注目していた。

「あれは近距離剣撃戦特化型の機体だ。まあ、一夏に相應しいといえは相應しい機体だな」

「いや、だからお前はあのISを知っているのか？」

筈は再び質問するが、大悟はいつもとは違う嫌悪感を顔に滲ませて

いた。

「……糞兄貴の創り上げた機体の一つだ。そして恐らくは……やはりか！」

大悟の視線の先にはレーザーを無力化しているヴァイサーガの主武装の一つ『雪片式型』の姿があった。

「待て！ あれってファーストシフトを終えていないんじゃないのか！？」

「あのマッドの事だ。装着したと同時に無理やりフィッティング関係を終わらせておいてもおかしくはない。というか、そもそもフィッティングやファーストシフトを行う必要があるのかも怪しい」

「ま、待て。あれは姉さんが作ったんじゃないのか？」

大悟の言葉に箒が声を上げる。箒はあのISは自分の姉が一夏の為に作った物だと思っていたのだ。しかし、大悟の言葉をそのままの意味で受け取るならば、大悟の兄があのISを作ったことになる。

「基礎自体は篠ノ之束だ。だが、それをマッドが改造したのがソウルゲイン、ヴァイサーガ、ラズアングリフの三機。内、ソウルゲ

インは俺が、ヴァイサーガは一夏、ラーズアングリフは弾の専用機として調整された」

「あゝコレか」

弾は自分の頭に巻いているバンドナをつついた。昨夜、大悟より渡されたバンドナ。これは弾専用ISらしいのだが、弾はそれを疑問に思った。ISはフィッティングなどが行われなければ待機状態にすることはできないはずなのだ。そのことを大悟に聞いてみた。しかし、大悟はただ一言告げた。

『そもそもその情報自体怪しいもんだ。なんせISの基礎関係は殆どがブラックボックスだからな』

弾はその言葉を聞いてもうコレ関係の話は必要以上に聞かないことにした。大悟が兄の堅悟を恨んでいるのは知っているから。これでも、一夏よりも付き合いは長い。それに空気を読んで動くのは自分の得意分野。だから、そのように動こう。

「まあ、ISを誰が作ったとかは置いておいて……ブレオンだと思ったら一応、苦無が付いているんだな」

「まあ、牽制用だろうけどな。ちなみに、あれは『烈火刃』といって、ほれ…あのように入射した場合は高熱を発生する」

大悟も表情を軽い物に変えて指を指す。その方向には、赤く発熱している苦無をセシリアに向かって投擲している一夏が居た。初めて扱うとは思えないほどの一夏の動き。

「す、すごいね織斑君。まだそんなにISを扱っていないはずなのに」

「うんうん」

周りの女子は一夏はすぐに負けると思っていた。男は女に勝てない。それが『常識』だったから。しかし、実際はどうだ？ あそこまで食いついているではないか。

「……思考トレースシステム搭載型だな」

「なんだそれ？」

「簡単にいえば自分がイメージしたとおりにISを動かすシステムだ。本来は、下半身不随患者の歩行補助のために作られたものだが

」

大悟はブツブツと呟き始めて考え始めてしまった。弾は息を吐くと周りの注目を再び一夏たちの方に誘導させた。段々、発言が堅悟への呪詛に変わってきたのだ。

「（苦勞するよ…全く）」

普段は三馬鹿のリーダーでもある大悟。しかし、兄が関わるとそれ以外のことに頭が回らない男でもある。そして、それをフォローするのが弾の役目なのだ。

「オラア！」

「いい加減に降参しなさいな！」

「誰が！俺は負けるわけにはいかないんだよ！」

レーザーライフルをマントで防ぐ。雪片式型の『零落白夜』がエネルギーをバカ食いすることに気づいた一夏はもう片方の剣を取り出そうとしたのだが、何故かロックがかかっており使うことができない。どうするかと考えていたのだが、ヴァイサーガの武装に光学兵器の威力を軽減するマントがあることに気づき、それを振り回しながらなんとか懐に入り込もうとしている。BT兵器を操っている間本体は動けない。だからその内に懐に入り込む。言葉だけでは簡単なのだが、実行するとなると結構難しい。そもそも、そのようなことは本人が一番知っているのだ。だから、懐に入り込めないようにBT兵器で攻撃している。

「いや、こつちには防御手段がある。要するに度胸があれば問題ない」

仮面の下で一夏は深呼吸をして覚悟を決めた。そもそも、大悟や弾と一緒に暴れていたときは生身でバットをもつ連中とやりあったことだってある。その時と比べればなんと優しいことか。

「つーか、落ち着いて考えれば…ビットも敵の数に入れればいいだけの話だろ。セシリア・オルコット!」

「な、なんですか?」

一夏は雪片式型の切っ先をセシリアに向けて叫んだ。

「今からお前に会いに行つてやるぜ。 精精、可愛くおめかししているこつたな！」

「は、はあ!?!」

「…なあ、弾。 アイツ…素だと思つか？」

「いや、素だろ」

一夏の煽りに顔を真っ赤にしているセシリアや明らかに機嫌を悪くした篤。そして、先程の発言を聞いて黄色い悲鳴をあげている周りの女子を見ながら二人は思った。

『あ、こいつまたフラグ建てやがった。どうせ、回収するんだろ?』  
もはや慣れた。

「お、おふざけはそこまでですわ!」

顔を真っ赤にしながらも攻撃を仕掛けるのはさすが代表候補生と言ったところだろう。展開しているブルー・ティアーズの砲口を全て一夏に向ける。

「これで…お終いですわ!」

「ッ! もらったア!」

砲口から光があふれた瞬間に一夏はヴァイサーガのブーストを作動させた。それは俗に瞬間加速と呼ばれる技法。そして、一夏の姉である千冬が最も得意とした技である。そして、ヴァイサーガは剣撃戦特化の機体。要するに近接戦闘をコンセプトに作成されている。

そのため、素早く近距離に入り込めるようにするためブースターの出力などが強化されている。つまりは。

「は、速い!？」

「邪魔なビットは破壊させてもらうぜ！」

体にマントを巻きつけて呐喊をしかける。セシリアがビットで足止めをしようとするがマントで弾かれて効果が薄い。だが、セシリアは笑った。一夏も予想していた。幾ら何でも接近戦の備えをしていないはずがない。そして、それは事実だった。

「うおおおおおー！」

「驚きましたが甘いですわ！ ブルー・ティアーズはまだありませんよー！」

それは切り札でもあったのだろう。セシリアのスカート部分から撃ち出されたのは2基のブルー・ティアーズ。

「（この距離でレーザー…いや、違う。恐らくはぶつけるタイプ！）」

一夏の推測は正しかった。最後のブルー・ティアーズはミサイル型だが、一夏に避けるという選択肢はない。エネルギー残量は確認していないが、恐らくは少ない。ここで決めなければ負ける。

「負けられるか……意地があんだよ！ 男にもなあ！」

「あ  
」

一夏は雄叫びと共に刀を振り抜いた。そして、勝負は決まった。

「あそこまで啖呵切って負けるというのもある意味才能だな」

「録画したし……あとで弄る材料になるな」

一夏は負けたのだ。敗因はエネルギー切れ。零落白夜を二回発動、瞬間加速に必要な以上のエネルギーを消費したことなどが原因である。まあ、こればかりは仕方ないこととも言える。

「さうて、次は俺らだ。本気で行くぞ？」

「……お前に勝てるビジョンが浮かばないよ。まあ、やるだけはやるけどね」

デジカメの録画モードで撮影した一夏の最後の雄叫びを見ながら二人は格納庫へと歩いて行った。トーナメント第二戦。対戦カードは九鬼大悟VS五反田弾。

第6話 VSセシリア〜一夏は若干熱血〜（後書き）

一夏は若干熱血なので、フラグを立てそうな言葉を素で放つ。まあ、原作でもあんまり変わらないけど。

次回は大悟対弾です。早く、ギャグ書きたいなあ。

感想待ってます…（チラ

## 第7話 大悟VS弾く相性は最悪く

「さくで、行くか」

「……ま、最悪十分以上は保ちたいね」

アリーナに二人の少年が向かい合っている。まあ、大悟と弾である。そして、二人ともISスーツではなく学園の制服である。全身装甲であるからなのか、三馬鹿はISスーツに着替えなくても良いという利点がある。だが、制服が破れたりするためあまりおすすめは出来ない。

「そんじゃま……」

「あいよ……」

「「勝負!」」

その叫びと共に二人の体が光に包まれ、ISを装着する。

「ソウルゲイン…装着完了ってか？」

全身を覆う青い装甲。神経路を思わせる白い線と全身各所に存在する緑色のコアらしきもの。そして、一番特徴的なのはその頭部に存在する鬚。

「……まるで今まで使っていたかのようになじむのは何故かむかつく」

「……そこまで言うなら使わなきゃいいだろ」

そして、弾もその体にISを纏っていた。それは一言で言うならば『無骨な兵器』。ソウルゲインやヴァイサーガ、そして世に広まっているISとは違い兵器然とした機体。赤茶色の重装甲に右肩に内蔵されているミサイルや、背中に二つ折りでマウントされているカノン砲、頭部はソウルゲインのように仮面ではなくキャノピータイプなど『全身銃器』と称するに相応しい外観。

「そいじゃま…弾。行くぜ？」

「…あいや」

戦闘開始のアラームがなったと同時に弾が取り出したショットガン

とアサルトライフルの弾丸が大悟に殺到した。

「ねえ、織斑君。九鬼君たちって強いのか？」

大悟たちの戦いを見たかった一夏はISスーツの上にジャージを着て観客席に戻ってきた。そして、待っていたのはクラスの女子の手厚い歓迎だった。そして、いよいよ始まった大悟と弾の模擬戦。一夏はふたりのことをよく知っていることから解説役になった。

「そうだな…二人とも俺より強いよ。特に大悟には…まだ勝てた試しがない」

弾は接近戦に持ち込めば必ず勝てる。しかし、そこまでに戦闘不能になることも何回かある。そして、一夏の言葉を肯定するかのような光景がそこにはあった。

「チツ。相変わらず怖い射撃だこと」

「……全部打ち落としておいてよく言っ」

そこにあつたのは、弾が撃つた全ての銃弾を拳で地面にたたき落としていた大悟の姿があつた。

「いくらISで強化されているからって体が追いつく……まさか、そのISにも」

「ああ。一夏よりも強力な奴がな。一夏のは恐らく体の動きをサポ  
ートするだけだろうが、俺のは骨が折れようと五感が生きてい  
れば『無理やり』動かせるタイプだ」

「……お前にピッタリだ」

弾はホバーで地上を移動しながらミサイルやショットガンを撃っていく。大悟は空中を『跳びながら』それらを回避していく。それは先程の一夏たちの戦闘と比べれば地味なもの。

「で、弾。そろそろ武装は大体把握できたか？」

「ま、あらかたな。お前はいいよな。ただ『殴る・蹴る』だけすればいいんだから」

「いやいやそうでもないぞ？ 相手の懐に入り込むときの背中が寒くなる感覚は慣れないぞ？ まあ、面白いけど」

互いに軽口をたたき合う。だが、水面下ではどうやって相手を自分の得意なフィールドで倒すかという思考に入っている。

「お前つてさあ…嫌いなはずの堅悟さんが作ったISを使ったり、そんな風に背中が寒くなる感覚を面白がるのか……ドMか？」

「ハッ。一日に一回妹とメールしなければ眠れないシスコンがよく言う」

その言葉だけで二人の間の空気が変わった。

「……始まるなあ」

一夏はそう呟いた。だてに親友をやっていない。二人の間の空気が変わったのは分かる。そして、この戦いは恐らくは一瞬で決まる。大悟が懐に入り込めるか否か。それだけ。弾の格闘センスは正直言えば街の不良レベル。空間把握・認識能力が高いため不良よりは強いが、大悟や一夏のように武術や武道を学んだものと比べれば弱い。下手すれば箒などにも負けるほど。だからこそ、弾は大悟に懐に入り込まれる前に決着をつけたいのだ。

「セシリアはどっちかと戦う。だから見ておいたほうがいいぞ？」

一夏はここにいないセシリアに向けて呟いた。そしてそれと同時に二人が動いた。

「墮ちろや、蚊トンボ！」

「潰れるや、ドン亀があ！」

ラーズアングリフから発射されたのは左肩に内臓されているファラ  
ンクスミサイルや両肩の大型シールド内部から発射された弾頭の中  
に小型のミサイルを格納しているミサイル、両腕のショットガンや  
アサルトライフル。それらが全てソウルゲインに殺到した。それは  
先程のセシリアとは比べものにならない程の弾幕。しかし、大悟は  
そのまま進む。

「コード『白虎咬』『羅刹刃』！」

大悟の叫びが聞こえたのか両手と両足にエネルギーが発生し、それ  
らはまるで『虎の牙』と『刃』のように形を変え、殺到するミサイ  
ルや弾丸を破壊していく。ミサイルをその両手や両足で破壊してい  
るため被害もそれ相応なのだが、そこを気にしないのが大悟である。

「鬱陶しいわあ！」

大悟との付き合いは一夏以上の弾だからこそ大悟がこの程度で止まるわけがないということも分かっている。ホバーで動きながらミサイルを適当に撃つ。

「な、弾は一体何をしているんだ!？」

「落ち着けて篤。一応、大悟から俺らのISについての説明書は渡されている。そして、弾が適当にミサイルを撃っているってことは……これだ」

一夏が指さしたのはラーズアングリフの仕様書の1ページ。そこに書かれていたのは『ジャマー』という一文。

「ハッ！ ミサイル撃つだけか「んなわけネーヨ」なに！？」

ミサイルはソウルゲインが破壊しようとするのと急に方向を変えた。それもフラフラと。そして、大悟は一つのことを思い出した。

「ジャマーか！」

「大当たり〜。おらよ！」

ジャマーで不規則に外れたミサイルのせいでバランスを崩した大悟にミサイルの第二陣が突き刺さり、爆発を起こす。さらには、外れたミサイルも次々と爆発していく。そして、黒煙に包まれたソウルゲインにダメ押しのマシガン掃射が浴びせられる。

「……………これで終わってくれりゃ……………いいんだが」

口ではそう言いつつも弾は信じていない。何故なら大悟は車に撥ねられて病院に入っても翌日には復活するほどの『バグキャラ』なのだ。生身でそんなのだ。全身装甲のISを纏っている以上。

「あゝ死ぬかと思った。さあて……次は俺の番だよな？」

「チッ。お前の体は超 金かっつての」

こうなるのは容易に想像ついた。そして、弾は思った。

「あ、俺オワタ」と

「なあ……あれは……どうなんだ？」

「まあ、いつものことだな」

観客席は静まり返っている。何故なら  
。

「レッツパーティー！」

「ちよい待て！ お前の体格と戦闘スタイル的に奥州筆頭ではなく豊臣だ」

もはや先程までの試合とは真逆のネタまみれの戦いになったからだ。もはや何も言うまい。

クラス代表決定戦第二戦「九鬼大悟VS五反田弾」

勝者、九鬼大悟。よって、十分の休憩の後に「九鬼大悟VSセシリア・オルコット」の試合を行う事となった。

第7話 大悟VS弾く相性は最悪く（後書き）

最後があっさりなのは、弾が近接格闘が苦手なためです。なので、懐に入り込まれたら負けです。

今回は、大悟対セシリアです。

「これが私のお兄様」はもう少し待ってください。セシリアやマクシミリアン以外の心理描写が難しくって・・・

## 第8話 大悟VSセシリア〜ソウルゲインの特殊能力〜

セシリアは格納庫で熱い頬を抑えていた。思い出すのは一夏との試合。大悟と弾の試合の時もずっとそのことを考えていた。

「意地があるんだよ。男にもなあ！」

あの雄叫びはセシリアが蔑んでいた男たちとは全く違う存在にも見えた。昔憧れていた雄々しく強い王子様のようにも見えた。

「織斑……一夏……一夏さん」

それはまるで熱に浮かされたような声。しかし、実際はそうなのだろう。セシリアは一夏に恋心抱いた。それが何故なのかは本人にしか分からない。

「（壁に耳あり、障子にメアリー、ついでにそこら辺に俺あり）」

彼女にとって不幸だったのは、格納庫に忘れ物を取りに来た大悟にその光景を見られたからだろう。しかし、大悟は空気が読めるのでそのままどこかへ去っていった。

「……なあ、これって俺の零落白夜以上にセシリアと相性悪くないか？」

「一夏もそう思った？ 実は俺も……」

一夏と弾は観客席でホットドックを食べながらそうぼやいていた。ちなみに、ホットドックは弾が先ほど作ってきたものである。一応授業中なのだが、自由にもほどがある。クラス的女子にも100円で販売しており、千冬や真耶には黙認する代わりにと献上しておいた。

そして、話の内容はこれから行われる大悟とセシリアの試合。クラス的女子は弾たちの会話に耳を傾けている。

「相手のエネルギー兵器を吸収して自分のエネルギーに変換するか……俺の零落白夜より使い勝手いいじゃん」

「燃費がいいどころの話じゃねえよ。相手がエネルギー兵器のみだつたらほぼ無限に戦えるな」

そして、耳を傾けて絶句した。なんだその装備は。そのような装備などまだどこの国も開発していない。それなのにそれが実装されているなんて。

「あ、あの…織斑君。織斑君たちのISって誰が作ったの？」

ただの企業が作れるはずがない。いくらISのエネルギーなどは共通しているとは言え、相手のエネルギー兵器を吸収して自身の動力などに変換できるなど。

「えっと…確か大悟のお兄さんの九鬼堅悟さんだったっけ？」

「……………ああ」

一夏は弾に確認をとるとそれを肯定する声が返ってきた。すると、女子の間から「ちよっとずるいな〜」などの不満が聞こえてきた。弾はこっそりと一夏の足を蹴りながらフォローに入った。

「そうでもないぞ？ 堅悟さんの場合は全て自分を基準にシステムとかを作っているから堅悟さんは平気だったけど大悟は無理だったとか普通にあるからな。皆だって簡単なゲームとか言われてやったゲームが予想より難しいとかあっただろ？ それと似たような感じだよ」

「あゝそっか。確かに、それは嫌だなあ」

実際はそんなこともないのだが、弾はこれで押し通すことにした。

「（お前余計なこと言っただけ）」

「（い、ゴメン）」

もし、女子が大悟に「ずるいな」と言っても大悟は笑いながらなだめるだろう。だが、その分の鬱憤は自分や一夏に降りかかるのだ。わざわざそんな目には逢いたくないのだ。そして、そうしているうちに試合が始まった。

「弾との試合では見せ場がなかったこの能力……今回は多用させてもらう」

「何を！」

最初は、第一戦の焼き直しにも見えた。セシリアがBT兵器で攻撃した瞬間に戦況は変わった。レーザーが着弾する瞬間に両手の甲のコアらしきものが光ると、両手に触れたレーザーが瞬く間に消滅した。

「な……一夏さんと同じ能力!？」

「……『一夏さん』？ ふむ……あの野郎。フラグでも建てたか？」

「ふ、フラグ？」

実際のところは先程の格納庫の『アレ』で知っているためこれは弄りである。まあ、口撃は戦闘でも効果があるため問題はない。ただ、それを普通に実行するのはどうかと思うが。

それはともかくセシリアにとって大悟がとった行動。それは、一夏が見せたエネルギー兵器の無効化に似ていた。

「なんですか？ その能力は！」

「相手に情報を渡すほど馬鹿じゃないが…どうせあの糞兄貴が公表するだろうし。教えてやるよ。もう一回攻撃してみな？ 恐らく、代表候補生であるセツシーなら分かるはずだ」

「なんですか、その呼び名は　　ッ。まさか…」

妙な呼び名のツッコミがわりにレーザーを撃ったが、案の定右で受け止められる。しかし、その時に彼女は見た。レーザーが右腕に吸収される様子を。

「……なるほど。エネルギーを吸収するものですか」

「まあね。だが、これの本領はそれだけじゃない。コード『青竜燐』」

両手から発射されるエネルギー波はセシリアに向かう。しかし、それはテレフォンパンチにも似た攻撃。セシリアは難なく避けるが、それだけが攻撃ではない。

「オラア！」

「え」

いつの間にか真横に居た大悟の蹴りでバランスを崩すと、そのまま連撃を浴びてしまった。

「『青竜燐』はあくまで初動技！ ソウルゲインの真価はクロスレンジよ！ そして『イーター』もこれこそ真価！」

「う、嘘？ エネルギーの消費が速すぎます！」

管制室にいた真耶はセシリアのブルー・ティアーズのシールドエネルギーが異常なスピードで消費されていくのを見ていた。しかし、千冬は冷静だった。

「落ち着きたまえ。恐らく奴のISに搭載されているエネルギー吸収能力が関係している」

千冬はそう言うの一つの本を取り出した。それは、千冬に堅悟から送られてきた三馬鹿のISの仕様書。そのソウルゲインのページにある一文が書かれていた。

エネルギー吸収装置『イーター』の特性は『エネルギー』を全て吸収し自身の糧とする事にある。レーザーやビームは勿論の事『シールドエネルギー』なども接触すればそれに入る。

「嘘ですよ？ これ……この装置だけでも世界最強になれますよ！？」

制限が掛けられており動力に限りがあるIS学園の訓練機や各種専用機に有利なのは勿論だが、制限が掛けられていない軍用ISなどにも有利に働くのは間違いない。

「ああ。幸いなのは、吸収しても変換効率が悪いことだ。程度にもよるが、自分の動力とするには、オルコットのレーザー五発分で5%回復と言ったところだな。だが」

千冬は内心で堅悟のことを思い出していた。弟を溺愛しており、弟を強くし、その弟と戦うことを夢見ている狂人。そんな男が変換効

率を悪いままにするわけがない。いずれ修正されたシステムを搭載するだろう。

しかし、千冬は気付かなかったが、変換効率が悪いのは自身の動力とする場合であり、変換せずにそのまま手や足にまとわせる際にはそれは適用されない。

「こりやマズイな。多分、セシリアちゃんは接近戦は得意じゃない。それは一夏との試合で分かった」

「ああ。だから……このままエネルギー切れだな」

観客席の二人はそう言ってこの試合を纏めた。すでに、大悟はセシリアの懐に入り込んで攻撃をし続けている。

「ふむふむ…あの九鬼君の動きは参考になるわ」

「そういえばアンタも格闘技が好きだったね」

周りの生徒達はすでに二人の試合を糧にしようとしている。特に、格闘戦が得意という女子は大悟の動きを参考にしている。

「セシリアちゃんには悪いけど…相手が悪い。射撃系は懐に入り込まれたら対応おしよがな。だからある程度近接戦闘もできなきゃいけないけど本職相手じゃね」

弾はセシリアと同じ射撃系だからこそ分かる。懐に入り込まれた瞬間、セシリアは負けたのだ。

そして、それを肯定するかのようにセシリアのシールドエネルギーがゼロになり、勝負が決まった。

クラス代表決定戦決勝：九鬼大悟 VS セシリア・オルコット  
九鬼大悟勝利。

## 第8話 大悟VSセシリア〜ソウルゲインの特殊能力〜（後書き）

ソウルゲインの特殊能力の一つ「エナジードレイン」と同じ効果です。

今回は、パーティということでごギャグ回となります。

修正として、弾と鈴のフラグを消滅させました。該当箇所は修正しました。その結果、大悟の好きな人が判明しました。

感想待ってます。そのほうが…もっと面白くなると思われそうです。それと、次回投稿後に設定集を上げます。といっても、三馬鹿のみですが。

## 第9話 Lets Party〜しかし、結局ボケる

そこはIS学園の食堂。そして、そこに様々な食事などが置かれていた。今日は一組が貸しきったのだ。理由は。

「それじゃあ…一夏のクラス代表就任を祝って…乾杯！」

このためである。大悟の音頭と共に一組の生徒はそれぞれのコップを掲げながら。

「カンパ〜イ！」

と心底楽しそうに乾杯すると、そのまま立食パーティーに移行した。そして、そんな中屋台のようなところで鉄板焼きをしているのは弾。

「ほい、広島風お好み焼きができたよ。とりあえず、リクエストあったら言ってくれれば作るよ」

「ごち〜。豚玉が欲しい〜」

「ちょっと待って！ 大悟が代表じゃないのか！？ というか、食堂貸し切り！？ そして皆違和感なし！？ ついでに、弾は何してんの！？ そしてそののほほんとした君は普通に注文しない！」

ツッコミ役の一夏、ご苦労様である。ちなみに、弾に話しかけているのは布仏本音という少女で、大悟の知り合いだった。そののんびりした口調や雰囲気の特徴の小動物系少女である。だから、ついつい弾があげたご飯に餌付けされたようである。

「ツッコミご苦労さん。さて、まずお前の質問に答えていこうか」

焼きそばをそもそも食べながら歩み寄ってきた大悟。どうでもいいが、焼きそばがこんもりと盛られている上に他にも色々な食べ物が乗っている。よく崩れないものである。

「まず、クラス代表に関しては俺が辞退して、セツシーも辞退したからお前になつたわけ」

「だから、その呼び方は…まあ、いいですね。私が辞退したのは自分の甘さを実感したからです。それと、以前は失礼いたしました。」

「い、いや。別にいいよ。でも、なんで？」

「それについては俺が説明しよう！」

いつの間にかおわかりしていた大悟が再び説明を始めた。要するに、クラス代表とはそのクラスの成長率を示す指針にもなる。そのため、ISに関しては初心者の一夏がいいとのこと。

「それなら大悟とか弾も当てはまるんじゃない？」

「俺の場合は千冬さんからやるんじゃないかねえと言われてね。まあ、ISの能力的な問題だ」

大悟のソウルゲインの『エネルギー吸収変換装置』は制限が掛けられている学園の全てのISに対して有利すぎる。例え、シールドに接触しなければ効果を発揮しないとは言え、大悟のセンスならばすぐに接触できる。だからこそ、クラス代表への就任はしないようにと千冬から言われたのだ。だが、大悟も一夏に丸投げするつもりだったので快諾。むしろ、丸投げするつもりだと話したら叩かれた。

そして弾ははっきり言うならば一対一の戦闘は弱い。弾はともに戦う者のサポートこそ真価を発揮するのだ。よって却下。本人も分かっているため何も言わない。

「つーわけで、一夏。お前さんが選ばれたわけ。とりあえず、頑張れ。俺らも協力するところはやるから。な、セッシー？」

「え、ええ。そ、その……一夏さん。私も力になりますわ」

「お、おう」

いきなり名前で呼ばれたので驚いたが、友達が増えるのはいいことなので気にしなかった。大悟の生温かい目が気になったが。ちなみに、弾は一夏に十字を切っていた。何故なら。

「（大悟の野郎…完全に弄る気だ）」

一夏の受難はまだ終わらない。

「しかし……何か……ようやくIS学園に来たんだなって思ったよ」

「夏はジュースを飲みながら篝やセシリアに話しかける。」

「そうなのか？」

「ああ。やっぱりESを実際に使つと実感が出るよ」

「その気持ちは分かりますわ」

少しだけのんびりとした空気。しかし、それを普通に叩き潰す男がいる。

「さあ！ 皆さん、お腹も膨れてそろそろ『イキたい』ころでは！  
？」

大悟の言葉に皆が注目する。そんな大悟の右手には二本の一升瓶が握られていた。

「おい待て！ 酒はいくらなんでもまずいだろ！」

「夏は女子の間を通過して大悟に詰め寄った。というか、気づくべきだったのだ。弾が燃え尽きたかのように真っ白になっていたのを。」

そして、それを介抱している本音がいた事を。そして、それが大悟の仕業だったのだと。

一夏に詰め寄られた大悟は眉をひそめて一言。

「はあ？ カル ス原液と生醤油だが？」

「別の意味で飲めるか！ んなもん！ つーか、それは薄めるもんだよ」

ラベルを見せるとそこにはカルピ と書かれた一升瓶と大きな筆文字で『生醤油』と書かれていた一升瓶があった。コレを飲んだら死ぬ。

「え？ 生醤油を薄めるのか？ 不味いぞ？」

「そつちじゃねえよ！」

ちなみに、弾が燃え尽きているのは大悟に生醤油を飲まされたからである。大悟はなかなか鬼畜である。

そして、こんな二人のやりとりを女子は笑いながら見ている。ぶっ

ちゃけ、漫才コンビに見えるのだ。

「分かったよ。薄めりゃいいんだろ？ ほれ」

「おい…何だこの…：…言葉では言い表せない色は」

大悟から渡されたコップには、茶色だか様々な色の絵の具を混ぜた水のような色した液体が入っていた。

「カルピスを生醤油で薄めた」

「別の意味で薄くなるわ！ 主に命とかそこら辺が。つーか、弾が白くなっているのもテメエが原因か！」

一夏が指差す方向には。

「アハハハハハハハ」

「し、ごたちー！？」

壊れたように笑っている弾とどうやってもとに戻すのか分からずに

右往左往している本音がいた。弾が壊れたのは、元々料理人の卵として鍛えられた味覚が生醤油を飲まされたことで破壊されたのだ。まあ、もとに戻ることを祈ろう。

「一夏……俺、もうダメ。あと……任せる」

片言でそう言い残し、弾は崩れ落ちた。

「……あ、よく見たらこの生醤油……五年前のものだ」

「お前、鬼畜にも程があるだろ!？」

ちなみに、崩れ落ちた弾は本音やその他の女子のおかげで復活した。そして、三馬鹿は新聞部の二年生の取材を受けたのだが。

「とりあえず、記事には三馬鹿ってことで載せとくね」

「「「ちよつと待ってよお姉さん!」「」」

もはやコント集団にしか見えなかった。

第9話 Lets Party!しかし、結局ボケる。(後書き)

注意!! 生醤油とカル スは大悟が責任をもって使いきりました。よいこの皆さんは真似しないように! 悪い子もだ! お兄さんとの約束だぞ!

さて、ということでごんな感じです。この後は設定集とちよつと番外編を書いたらチャイナっ子がきます!

ちなみに、ヒロインですが大悟は簪として(まあ、姉のほうが来ないとは限りませんが)、弾は誰にするか。え? 一夏? 一夏はハイレムを作つて大悟と弾にいじられるのですよ

設定：キャラ編（前書き）

若干のネタバレもふくんでいるので注意してください。

## 設定：キャラ編

織斑一夏

使用IS：近接戦闘剣撃戦特化IS『ヴァイサーガ』

待機状態：白色のガントレット（右手）

戦闘スタイル：刀剣使用による近接戦闘

役職：三馬鹿ツッコミ役、一組クラス代表

特技：家事全般、自覚なしの恋愛フラグ建設

呼ばれ方：一夏、一夏さん、織斑君、おりむー

## 備考

言わずと知れた原作主人公。ここでは約一名の影響で若干の熱血思考、ツッコミ属性である。そして、鈍感具合も平常運転で、中学時代も男たちの敵に認定されたが、大悟と弾に弄られまくっていたため逆に可哀想と思われていた。

家事スキルは高く、三馬鹿の部屋掃除などは基本一夏の役目。かつて誘拐されたことがあったが、一緒に誘拐された大悟や弾と三人で逃げたこともあり、何気に生身の戦闘能力が高い。

好きな女性のタイプは分からないとのこと。そのため、不特定多数の人間を暴走させる事がある。

大悟にネタ的な意味で復讐したいのだが、結局返り討ちに合う男。

「よくさ？ 俺のこと朴念仁とか言っているけどさ……大悟のほうがヒドイだろ！？」

「付き合う？ いいよ。どこまで？ って、大悟に弾？ なんて…指の骨を鳴らすの？ なんて、ショットガンにゴム弾を装填するの？」

九鬼大悟

使用IS：近接戦闘格闘戦特化IS『ソウルゲイン』

待機状態：手甲付き手袋（右）

戦闘スタイル：徒手による格闘戦

役職：三馬鹿リーダー兼ボケ、対暗部組織『更識』構成員

特技：サバイバル、自覚ありの混沌フラグ建設、挑発、扇動

呼ばれ方：大悟、大悟さん、九鬼君、クッキー

備考

三馬鹿のリーダーにしてボケ役。基本的にノリで生きている男。実の兄を毛嫌いしているが、その兄に対抗するためには兄が作ったISSしか手段が無いため自己嫌悪に陥ることもある。ちなみに『弄り、

煽り』が得意である。

生活能力は皆無。サバイバル知識が高いが、日常生活では何の役にも立たない。しかし、第二回モンド・グロツソの際に三馬鹿一纏めで誘拐されたが、大悟の知識で逃げ出しているため有事の際は役に立つ。生身でも強い。というか、バグキャラ。でも、千冬には負ける。あの人はチート。

好きな女性のタイプというか、簪に惚れている。そのため、簪には基本的に甘い。

ちなみに、サバイバル経験のせいで味覚が崩壊しており『とりあえず、食えればok』という感じ。そのため、「生醤油+カルピ 原液」を飲んでも平気である。

全身に修行や喧嘩でついた傷が大量にあるため、公の場で肌を晒すことはない。そのため私服も基本的に体が隠れる物。

「俺から『ノリ・煽り・ボケ』をとったら後は『改造人間?』というカテゴリしか残らないだろう」

「ん? 将来は尻に敷かれそうだな、だと? 惚れた女ならば本望だ」

五反田弾

使用IS：遠距離射撃戦特化IS『レーザーアングリフ』

待機状態：バンダナ（黒）

役職：三馬鹿の火消し役、潤滑油

特技：ダーツ、料理、様々な意味でのフオロー

呼ばれ方：弾、弾さん、五反田君、ごたちー

## 備考

三馬鹿の後始末役にして潤滑油。大悟などが引き起こす自体の火消しやフオローを行うが、その鬱憤が一夏弄りの時に発散される。実家が食堂ということもあり、炊事は得意で和洋中の料理の基本的なレシピは全て知っている。空間把握・認識能力が高いため弾道計算なども『なんとなく』でできてしまうが、それでも計算などはしっかりと行っている。大悟とは小学校からの付き合いで、その頃から大悟のフオロー役をしていたので緊急事態への適応力が高い。ちなみに、弱シスコン属性。

実は、鈴に惚れていたのだが鈴が一夏を好いているのに気づき身を引いた過去があつたりする。そのため、鈴の恋路を応援する傾向にある。多分、この小説で一番イイ男。

ちなみに、大悟の行動などは八割予想できる。

「あるがままに受け入れる。それが大悟からの被害を軽減する最善の手だよ」

九鬼堅悟

使用IS：???

戦闘スタイル：???

役職：篠ノ之束のボディガード、ISの開発者その2、三馬鹿のIS製作者

備考

大悟の実の兄。束とは束がIS開発に着手した頃からの付き合いで、狂人同士波長があつたのか今では熟年夫婦並に意思疎通が出来ているらしい。そして、弟である大悟をとて溺愛しているのだが、その溺愛の方向がヤバいので大悟からは憎悪されている。また、大悟を強くして、その強くなった大悟と戦いたいと言っていることから少なくとも大悟よりも強く、束と同等の頭脳を持っていると推測される。各国上層部もそのことを知っているようである。現在は束と共に行方をくらませている。

ISは束と堅悟の合作であるが、対外的には束が作成したことになっている。

**設定：機体編（前書き）**

IS原作と設定などが違う部分があるため注意してください。

## 設定：機体編

近接剣撃戦特化IS 『ヴァイサーガ』

武装：日本刀『雪片式型』、両刃刀『五大剣』、苦無『烈火刃』

外観：白い鎧武者。

### 武装能力

雪片式型：かつて千冬が搭乗していた『暮桜』に搭載されていた武装の後継。外観は片刃の日本刀。通常はヴァイサーガの左腰に佩いており、ヴァイサーガの基本兵装となっている。

五大剣：ヴァイサーガの右腰に佩いている諸刃の刀。外観は日本刀というよりも西洋剣に近い。現在はロックがかかっているのか使用することができない。

烈火刃：苦無型の投げナイフ。投擲時に発熱する。また、若干の誘導性を持っている。

零落白夜：ヴァイサーガの単一仕様能力とされているが、実際は雪片式型に搭載された模倣システムであることが仕様書により判明している。それ以外は原作と同様。

## 搭載システム

思考トレースシステム：一夏の思考をトレースし、動きのサポートを行うシステムである。

## 備考

一夏の専用機。主に、剣撃戦用にチューニングされており加速性能などが高い。特徴的なのはマントであり、それにはエネルギー兵器の威力を軽減する能力がある。製作者の九鬼堅悟の意向なのか単一仕様能力、一次移行、絶対防御などの機能は現在確認されていない。

近接格闘戦特化IS 『ソウルゲイン』

武装：無し

外観：青い拳闘士

## 武装能力

攻撃手段は徒手空拳であるため武装は無いが、堅悟により九鬼家の

武技のモーションが入っているため音声入力でそれらが使用できる。

青竜燐：両手から放つエネルギー波。片手でも放つことができるが、その場合は連射に重点を置いているため威力は低い。

白虎咬：両手に纏わせたエネルギーを牙のように鋭角化させ、連撃を浴びせる。

羅刹刃：両足に纏わせたエネルギーを刃のように鋭角化させ、蹴りを放つ。

## 搭載システム

思考フィードバックシステム：ヴァイサーガに搭載されている思考トレースシステムよりも強力なもので、骨が折れていても脳が動いていれば無理やり体を動かすことも可能。

エネルギー吸収変換システム：敵のエネルギー兵器を吸収し、自身の動力とする事が可能なシステム。現在は自身の動力とするには効率が悪いが、敵のエネルギーをそのままカウンターの形で武装とすることは可能。

重力発生システム：その名のとおり重力（斥力・引力）を発生させるシステム。これにより、空中に擬似的な足場を作るが可能。

その他にも様々なシステムが搭載されているが、それらは仕様書でもぼかされている。

## 備考

大悟の専用機。近接格闘戦用にチューニングされており、加速性能や装甲の堅牢さに優れている。開発者の九鬼堅悟の意向なのかヴァイサーガと同じく単一仕様能力、一次移行、絶対防御は搭載されていない。

遠距離射撃戦特化IS『ライズアングリフ』

武装：各種銃火器、アーミーナイフ

外観：赤茶の重戦車

各種装備

アーミーナイフ：あくまでナイフである。それ以上でもそれ以下でもない。

ショットガン：本来は牽制用であるが、使用する散弾によっては通常兵装として使用できる。

アサルトライフル：通常兵装。弾幕をはる際にも使用可能。

マトリクスミサイル：肩部シールド内に内蔵されているミサイル。  
弾頭部分に小型ミサイルが搭載されている二段式ミサイル。

フアランクスミサイル：左肩部に内蔵されているミサイル。一度打ち上げたミサイルが上空から降り注ぐ。また、弾頭を変更することで文字通り『鉛玉の雨』を降らせることも可能。

その他様々な銃火器が搭載されている。

## 搭載システム

照準補正システム：狙撃時や射撃時の照準補正を行うシステム。風向きや空気抵抗なども自動で補正する。

エネルギー補給装置：専用のアダプターをISに接着させることでエネルギーを回復させる装置。ただし、ヴァイサーガとソウルゲインにしか使用できない。

ホバーシステム：地上を移動する際に必須なシステム。重量過多なのでコレがなければまともにも歩くことも出来ない。

第10話 セカンド幼なじみ登場〜大悟に鉄槌?〜

一夏がクラス代表に決定し数日が経ったある日の事。三馬鹿と箒とセシリアと一緒に行動する事も多くなった。普通なら、メンバーの名前をとって「九鬼グループ」とか「織斑グループ」とか呼ばれるのだろうが、「三馬鹿+」という扱いになっていた。

「そつえば、一夏。転校生の噂聞いたか？」

箒がそう言っで一夏に話しかける。ちなみに、三馬鹿は相変わらずポーカーをしていた。

「え？ 転校生？ 今の時期に？」

一夏の疑問も尤もだった。しかし、現状を考えれば分からなくもない。

「何でも、中国の代表候補らしい」

「へー」

「中国……」

箒の出した新たな情報に一夏は「代表候補生なのか」と感心し、残り二人はある少女を思い浮かべた。そっぴやアイツも中国だったような？

「わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら？」

「むしろ、俺達だろ」

腰に手を当てて発言したが、即効で大悟に否定される。確かに、大悟たちの存在を危ぶんでの転入ならば納得行く。まあ、セシリアは納得行かない様だが理解はしたようである。

「しかし……どんな奴なんだろうな」

「……気になるのか？」

一夏の発言に箒は機嫌をしたように詰め寄る。箒からすればそんな奴に興味を持つな。お前は色々やるべき事があるだろうと言いたいのだろう。だが、冷静に考えればクラス対抗戦で戦うことになるので興味をもつのは普通なのだが。

「大丈夫ですわ。このセシリア・オルコットが一夏さんを鍛えて差し上げますわ！」

「（俺としては気兼ねなく頼める弾とか大悟のほうがいいなあ）」

男同士で親友なのでいつでも頼める大悟たちと、部屋が違うし男女の違いもあるため頼みづらい筈たち。どっちに頼むかと言われれば一夏は迷わず大悟たちに頼む。まあ、仕方ない。

「なあ、大悟。中国の代表候補生ってもしかしてアイツか？」

「十中八九な。というか、ほれ。雑誌に乗っているし。そして、全員後ろの扉に注ぐ目」

大悟の声にクラス中が教室後方の扉を見る。そこには、今から壁に背を預けてポーズを決めようとしていたツインテールの少女が居た。

「ちょ、ちょっと！ まだ早い！ ていうか、大悟！ アンタよく私の格好良い登場を台無しに「んなもん知るか」ムキー！」

大悟に登場シーンを台無しにされたのは鳳鈴音。かつて、三馬鹿と

一緒に行動していた幼なじみである。

「鈴！ お前だったのか！」

一夏はセカンド幼なじみと久しぶりに再開したのでテンションが上がっている。しかし、ここでふと気づく。大悟が動いていないのだ。こんな時に大悟が動かないのはどうかしている。

そして、ふと思い出した。今は朝。そして、もうそろそろあの人が来る。それに気づいた一夏はすぐに席についた。突然の行動に全員があっけにとられるが。

「さて、お前ら。朝礼があるということは分かっていたはずだが？」

すぐに現れた千冬により席についていなかった生徒は全員叩かれた。ちなみに、なぜ大悟が動かなかったかという点。動こうとしたときに千冬の到来に気づいたからである。そして、それに気付かなかつた鈴は頭を抑えながら逃げ帰った。南無。

「遅い「やかましい」「んきゅ!？」」

そして、昼休み。食堂に向かった一夏たちを待っていたのは仁王立ちでポーズを決めている鈴だった。しかし、大悟のチョップを脳天に受けうずくまった。

「ぬおおおお?」

「さうて、飯食うべ」

「お前、容赦ねえな」

「あゝ鈴。大丈夫か?」

うずくまって悶絶する鈴を無視して食券を買う大悟、ツツコミを入れる一夏。そして、どこから取り出したのか氷嚢を鈴の頭に乗せる弾。どこぞの辻斬りいたち妖怪のように流れるような連携である。

「大体、入り口に立っていたら邪魔だろうが。ここは本国の施設じゃないんだ。ちゃんと順番は守ろうね?」

「ムキー！ 子供扱いするなー！」

「はいはい。ソウダネ〜子供じゃないね〜」

「キシヤー！」

完全に遊んでいた。ちなみに、昔からこんな感じであった。まあ、それは兎も角、席について食事をとりはじめた四人。そして、遅れてやってきた篤とセシリア。

「……一夏さん！ この方とはどのような関係ですの！？」

「そうだ！ きつちり説明してもらっぞ！」

「なんなのよアンタら！」

そして、始まるのは女の戦いとそれに巻き込まれる一夏。そりゃあもう周りの注目を浴びる浴びる。

「……さ〜て、ワラ人形でも作るか」

「コックリさん、コックリさん。一夏のフラグが立たない方法はありますか？ 『ない』、か」

大悟はどこからともなく藁を取り出してワラ人形を作り始め、弾はコックリさんに一夏のフラグ建築能力をどうにかする方法を聞くが答えは『無い』だった。

「お前ら…助けてくれ」

「ハッ！ 誰がするかバーカ！」

一夏のSOSを切って捨てる二人。こいつらなんで親友なの？

その日の夜、三馬鹿は夕食を済ませると部屋でそれぞれ自由に過ごしていた。一夏は雑誌を見ており、弾はテレビでも名の知られている料理人のレシピ本を見て、大悟は鉄棒のような器械に足をかけ逆さの状態で腹筋を行っていた。

「しっかし、鈴が来るとは思わなかったぜ。大悟たちもびっくりしただろ？」

「いやあ…俺らの場合は中国の代表候補生と聞いた時から大体想像していたからな」

「つーか、お前も気づけよ」

雑誌を見ていた一夏はそう言うが、大悟たちに見れば大体想像ついた。というか、分かっていたのだ。フラグ的な意味で。

「というか…一夏。お前、鈴との約束を覚えているのか？」

レシピ本を見ていた弾は一夏にそう尋ねる。弾は面倒見が良い。鈴に「一夏をどうやったら振り向かせることができるか」などと相談を持ちかけられるほど。だからなのは知らないが、弾は若干鈴に肩入れしている部分がある。

「おう。覚えているぜ」

そして、一夏はそう言ってサムズアップをする。その瞬間、弾は思った。

『あ、こいつ絶対違う風に覚えていやがる』

約束云々は知らない大悟も気づいた。やっぱりこいつは女の敵だ。

「……ま、いいけどよ。つーか、そろそろ来るぞ?」

腹筋をしていた大悟の言葉が言い終わると同時に部屋に入ってきた少女が居た。今話題に上っていた鈴である。だが、隣には簪も居た。

「やつほー! 三人で一部屋って言うていたけど本当なんだ」

「えっと……おじゃまします」

「よーす。つーか、なんで簪も?」

「……同じクラスだから」

筋トレが終わったのはタオルで汗を吹いている大悟。ちなみに、上半身は裸である。しかし、それに対して何も言わないのはもはや慣れているのだろう。

「とりあえず、お茶でいいか？ あ、一夏。戸棚にクッキーあるから取ってきてくれ」

「あいよー」

弾はお茶を淹れに席を立ち、一夏はお菓子を持ってきた。大悟はとりあえず座布団を敷く。普段の生活環境がわかるものである。さしずめ、母親（弾）と手伝いができる息子（一夏）とダメ亭主（大悟）と言ったところか？

「でも、こうやって四人で過ごすのって久しぶりじゃない？ 相変わらず三馬鹿って呼ばれているの？ って、ゴメン。簪を抜かしていたわ」

「……別に構わない」

四人が出会ったのは小学校の中頃だったか。とにかく、出会ってから基本的に四人で行動していた。大悟は『更識』に所属している関係上、ちよこちよこ居なくなっていたがそれでも四人でいることが多かった。

「まあ、簪は私たちが知らない大悟を知っているんでしょ？」

「お？ もつ名前呼びか」

「まあね。というか、大悟。アンタ、傷増えてない？」

大悟にそう返事しつつ鈴は大悟の上半身を見つつそう言った。大悟の上半身は大小様々な傷がついている。それこそ、大きな裂傷から小さな生傷まで大量に。

「あ……実は、IS学園に入る前の春休みに山にこもっていたからなあ」

「それで連絡取れなかったのか」

弾が頬を引き攣らせながら苦笑する。三人がISを使用できると知れ渡ったとき、千冬の助言で一夏は一時五反田家に居候しており、大悟もそうするようにおうとしたのだが、本人は父親と共に山に籠っていたらしく連絡取れず。千冬はもうどこかの組織に誘拐されたのかと肝を冷やした。

「なあなあ。どうすりゃそこまで鍛えられるの？」

男としてある意味理想の筋肉を持つ大悟。それに一夏が憧れるのも

仕方のないことなのかも知れない。

「ん？ 俺のこのワイヤーの如く引き締まった「お前の場合は荒縄だろ」

「弾！？ なんか、首から『パキヨツ』って音したぞ!？」

ワイヤーとするにはガタイが良すぎる上に傷らだらけで荒縄と評したのだが、それが気に入らなかつた大悟にワンパンを受けて弾撃沈。言わなきゃいいのに。

「とりあえずは、毎日鍛え続けていけば…いけんじゃね？」

そして、そんな弾を華麗に無視しつつ質問に答える大悟。だから、なんでこいつら親友？

「まあ、アンタらが変わっていなくて安心したわよ」

「え？ そっか？」

「」「」「……」「」

鈴がとても嬉しそうに呟くので一夏は結構成長したと思ったんだけどなあ。と呟くが残り三人は一瞬表情が変わった。大悟と弾は幼なじみでいつも一緒にいたから、簪は女の勘で。

「（なんかありそうだな）」

大悟はシャワーを浴びるために席を立ちながら内心毒づいた。簪は一度部屋に戻るらしく一緒に席をたった。

「（つたく、一夏は一夏で鈍感だし、鈴は何か抱えているし…弾は）」

ちらと振り返ったそこには一夏と顔を少し赤くしながらアピールしようとしている鈴。そして、そんな二人を寂しそうに見ている弾がいた。

「ねえ…大悟。弾君って」

「その先は言っちゃるな」

簪が見上げながら弾の事を聞こうとするが、大悟により口止めされる。その瞬間、入り口が開いた。

「「え？」」

「「あ………」」

そこに居たのは箒とセシリア。どうやら鈴がここにいることを聞きつけて先を越されてなるものかと勇んで走ってきたらしい。しかし、扉を開けたところには上半身裸の大悟とそんな大悟と密着している簪。しかも簪はラフな薄手のパジャマで大悟に密着していたため若干着崩れている。ついでに、箒たちにまだ慣れていないのか顔が赤くなつた。これが止めだった。

『上半身裸で汗をかいている』男+そんな男にパジャマが着崩れて、顔を赤くしながら密着している少女!!??』

「破廉恥な！」

「ゲフツ!？」

耳年増な箒の鉄拳を顔に受け吹っ飛ぶ大悟。しかし、それでも簪を庇う辺りは男とも言えるだろう。

「「「なんぞ!?!」」」

簪を抱いて吹き飛んできた大悟に驚く三人。混乱の宴が始まる？

「　　ッ！　大ちゃんがちゃんとハプニングを起こした気がするー!」

「お嬢様ってさくかんちゃんとクッキー相手には凄い勘が働くよね」

「……（、）（ハア　どうにかならないかしら?」

ここもある意味混沌としていた。

第10話 セカンド幼なじみ登場〜大悟に鉄槌?〜 (後書き)

まあ、たまには大悟もね？

そして、次回は……どごその青春ドラマみたいに一夏と弾が喧嘩？

第11話 男の青春？〜別名一夏と弾の大げんか〜

「……王手」

「なんの」

寮のロビーで大悟と弾は将棋をさしていた。二人の将棋を見ている簪や本音がいるが、周りには女子生徒が雑談をしているふりをして大悟たちの動向を監視している。

「しかし…二人つきりで話をしたいとは…鈴木も頑張るねえ」

「まあ、あつちからすれば気が気ではないわな」

大悟と弾はそのような理由で部屋を追い出されていた。そして、寮のロビーで将棋を始めた。そして、いつの間にか本音を連れた簪がやってきてこんな感じになった。

「つーか、お前も気が気ではないんじゃないか？」

「……まあ、な。いや、吹っ切っているつもりだけど……若干きつ

「いわな」

それは二人の間でしか分からない言葉。聞こえていても近くにいる簪と本音くらいにしか聞こえない。苦笑しながら金で自分の王を狙っていた桂馬を取る。

「イイ男だねえ。俺が女だったら惚れていたかも」

「気持ち悪いからやめれ。つーか、お前の場合は性転換していても変わっていなさそうだから怖い」

「違うない」

将棋をさしながら笑いあう美少年二人は実に思春期の女生徒の煩惱を刺激した。紳士みたいな柔らかい笑みを浮かべる弾にワイルド系のいかにも『男』を意識させる大悟にときめく少女もいれば『掛け算』の方向にスライドする少女などたくさん居た。

「つーか、簪がいるということである程度分かっていたけど…本音もいたのか」

「久しぶりだねクッキー」

「だからその呼び方やめれ？」

猫を模したパジャマを着てほにゃとした顔で右手を上げる本音。袖が余っている上にそのような雰囲気なので大悟からは完全に妹か小動物みたいに扱われていた。今だって顎をくすぐられて「うにゃ」と喉を鳴らしている。

「……大悟」

「怒るなよ」

簪からの冷たい視線ですぐにその行為をやめた大悟。その光景を見て弾は大悟の暴走が過ぎたら簪を呼ぶのも手と考えた。

「さて…そろそろ部屋に戻るか？ お互い…飽きただろ？」

「まあな。つーか、将棋で盤上に互いの王しか残らない事例ってあるのな」

大悟が将棋を終わらそうと声をかけると弾も頷く。将棋盤の上には互いの王将しか残っていない。この二人、互いの性格を知り尽くしているためいつも将棋やチェスはこのように互いの王が残る。その

ためまともにならなかつたことなど無い。これが一夏相手なら以下のよ  
うな結果になる。

大悟対一夏の場合：大悟の積極的攻撃により王将以外を全て奪われ  
て完全包囲。

弾対一夏の場合：いつの間にか王手を掛けられており逃げ場なし。

結論：一夏は戦術系のゲームには弱い。

さらに言うならば、一夏は性格的に搦手に弱いしセシリアの件でわ  
かるように短気な部分がある。そこを突かれると結構弱い。簪たち  
と別れてから、どうやって一夏を強化するかを話し合いながら部屋  
の前まで来ると中からなにやらドタドタと音が聞こえた。

「あん？ なんじゃ」「一夏の馬鹿ア！」「へブア！？ り、鈴、お前  
d「もう知らない！」「またかい！？」

大悟が扉を開けようと近づいた瞬間に中から扉が開き、近づいてい  
た大悟の顔に思い切りあたった。頑丈な大悟であるが、瞼にまとも  
に当たったためうずくまっっている大悟を突き飛ばして出てきたのは  
鈴。

「おいコラア！一言詫びいれても罰は……」

「……泣いていたな」

二人の視線の先には泣きながら走り去っていった鈴の後ろ姿があった。そして、部屋の中には何が起きたか理解していない一夏がいる。

泣いている鈴が一夏の部屋から出てきた 『約束』のことを言ったのだろう 一夏は女心を理解していない 恐らくは、無神経なことを言ったのだろう つまりは、そういうこと。

「よし、大悟。縛り上げて、お前の知り合いがママをやっていた店があるよな？そこに連れていく」

弾は静かにそう告げた。大悟はそんな弾に気圧されている。ちなみに、知り合いのママとは大悟が懇意にしている表向きはクラブ、裏は情報屋のママさんであり、外見は筋骨隆々の美丈夫だが、心は花も恥じらう乙女である。

「いや…あるけども……」

「じゃあ、さっさとやるうか。いや、一応は話を聞いておいたほうがいいな。一夏、説明してもらおうぞ」

弾はそう言って一夏の向かいに座った。大悟は弾の怒りを感じて素直に部屋の中に入った。そして、緊迫した空気が流れる中で弾が一夏の事情を説明するように告げた。

「ふざけんア！」

「落ち着けて！」

それは実に奇妙な光景だった。普段は温厚で三馬鹿の良心とまで言われる弾が一夏を殴り飛ばしており、その弾を大悟が羽交い締めにして宥めているという光景。

一夏が話した理由は簡単にいえば、鈴が料理が上手くなったら酢豚を毎日奢ってやるという約束を思い出してそれを言ったらあんなだった。恐らく現実にはプロポーズのような約束だったのだろう。まあ、マセガキとも言えなくもない。

「忘れていた。そのほうがマシかもな！俺達はISを起動させた

からゴタゴタが多すぎた。鈴だってそれを理解しているから、忘れていたと言われたら怒るだろうが理解はしてくれるさ！」

恐らく約束を忘れていたと言えば、一発叩かれるだろうが理解はしてくれるはずだ。三人を取り巻いていた状況というのはそれほど混乱していたのだから。『世界でISを扱える男たち』という存在はそれほどものだから。

「で、でも……俺はその……」

一夏は言葉が続かないようであつむいている。それが弾に燃料を注ぐ結果となった。

「あの時、分かっていたいなくてもいいさ。だが、落ち着いて考えれば『そういう言葉』だってわかるだろうが！ お前が今恋愛とかを考えられないなら！ 『今はまだそんなことは考えられない。だから、落ち着くまで待ってくれ』とか言っておけばいい！」

弾は大悟を引きずる勢いで叫ぶ。幸いというべきか、大悟の方が身長も体重も力も上回っているため大丈夫だが、下手をすれば再び一夏に殴りかかるかもしれない。

「テメエはいつもそうだ！ 鈍感とか言う言葉じゃ言い表せないほどの人の気持ちを考えない！ なんで……なんでお前が……クソ！」

弾はそれだけ言い残して大悟を振り払って部屋を出て行った。残されたのは頭を掻いている大悟とうつむいている一夏。大悟は溜息をつくと冷蔵庫から取り出したペットボトルを一夏に放り投げた。

「一夏。今回ばかりは…真面目に言わせてもらおう。お前が恋愛ごととかに興味がないのは分かっている。でもな？ 周りはそうじゃない。今までのお前の言動を見れば『女を誰かれ構わず惚れさせて、惚れさせた後は何もせずに放置。女の気持ちを理解しない糞野郎』と見る。現に、中学時代の俺ら以外の男子はそう思っていた」

「大悟……」

「お前がよかれと思ってとった行動で、喜ぶ奴もいれば悲しむ奴もいる。勿論、そんな行動をとるなどは言わねえよ。でも、そんな奴がいるって事は覚えておけ」

「……ああ」

一夏も少しは理解したのか息を吐いていた。そして、大悟は天井を見上げてふと呟いた。

「鈴がお前が好きだというのは理解しているか？ まあ、別にお前

がどう思っているとかは関係ない」

「ああ。鈴だけじゃない… 篝もセシリアも」

「分かっているならよし。まあ、そこはどうでもいい。決着を付けるのはお前だ。俺からはさっさと誰かを選べとかは言わないし、おちよくりはするが核心までは迫らん。まあ、なんかその人数が増えそうな気がしないでもないが」

一夏ならあり得ることなので遠い目をしながら笑う大悟。しかし、すぐに顔を引き締め口を開く。

「弾な？ 鈴に惚れていたんだよ。だが、鈴から一夏をどう振り向かせればいいのかという相談を受けてあえなく失恋した訳だ」

それについて弾は「自分がさっさと言わなかったから」と諦めている。告白する前に振られたのはショックだった。だが、まあ仕方ない事だと無理やり納得して鈴の恋路を応援することにした。だからなのか一夏の今回の行動に激昂したのだ。

「自分勝手な理由だわな。お前の気持ちを考えずにただ『鈴に幸せになってほしい』という自分の理想を押し付けようとしている……。なあ？ アイツはお前の親友でいいのかい？」

大悟はペットボトルの水を飲みながらそう告げる。しかし、一夏は顔を上げて言い切った。

「ああ。アイツがここまで言ってくれたのは、鈴のためでもあるし俺のためでもあるんだろ？俺は…こんな性格だから多分、知らないうちにお前らの言うフラグを建てるし、お前らの言う事を忘れていたりするんだろっけど」

「……さあ？ 弾じゃないからそこは分からんね」

一夏は大悟に笑いかけると立ち上がった。大悟は何も言わない。恐らくは、一夏は弾の所に向かうのだろう。

「とりあえず、殴り合うなら人のいないところをお薦めしよう。それと…鈴に会いに行くかはお前に任せる。だが、弾が鈴に惚れていたらっていうのは言うんじゃねえぞ？」

「ああ。それと…大悟。ありがとう」

「……フッ」

一夏はそう言い残して部屋を出て行った。残された大悟はペットボ

トルの水を飲み干すと一言。

「……俺、大して何もしてないなあ」

くつくつと笑いながらその場に寝転がった。その顔はどこか優しげだった。

「ハッ！？　今回ボケてない!？」

んなことあどつでもいい。

第11話 男の青春？〜別名一夏と弾の大げんか〜（後書き）

書いて思ったこと。これ、ISでやる意味あんの？

そう考えたけど、やっぱりこんな描写もないとね。ちなみに、これはゲームだとあれですよ。今後出てくる合体攻撃ができるかどうかのイベントですよ。

とりあえず、次回をお楽しみに。

## 第12話 男の青春？〜弾と一夏の喧嘩後編〜

一夏が弾を見つけたのは屋上だった。一夏は金網に背を預けて座って空を見上げている弾の横に座って、同じように空を見上げた。

「あの「謝る必要はない。俺が勝手に横恋慕して失恋して…お前に八つ当たりしたただけだ」」

一夏の言葉を遮って弾はそれを告げると立ち上がった。

「一夏。お前は…もう少し自分の行動を客観的に見る。そうすりゃあ、お前が密かに目指している大悟みたいになれるぜ？」

「……本当なのか？」

一夏は大悟に憧れていた。基本的にノリで生きているが、締めるところは締めているし何よりも『誘拐事件』の時に大悟がいたから逃げられたのだ。千冬とは違う意味で憧れている。同性だからこそ千冬以上に憧れている部分もある。

「アイツは確かにノリで行動している。でも、実際はそうじゃない

事を俺たちは知っているだろ？ 鈴が苛められていた時も率先して生徒会長に喧嘩を売りに行ったのはあいつだ」

「ああ。それに、俺はお前にも憧れているんだけどな」

「あのなあ。そうならもう少し空気を読めよ」

一夏が弾にも憧れていると告げると、弾はまずは空気を読めと告げる。憧れていると言われるのは嬉しいが、一夏を見ているととてもそうは見えない。

「んじゃ、俺は行くけど……もう少し空気を読めよ？」

「頑張るよ」

一夏はそう言うが、弾は正直信じていない。一夏が空気を読むことができないのはある意味先天性のものなので諦めているのだ。だけど、こうやって自分の言いたかったことを言ったからなのか弾の心は穏やかだった。

「ただいま」

「お帰り〜。んで？ 何話した？」

「適当にな」

弾が部屋に戻ると大悟がテレビを見ながら菓子パンを頬張っていた。弾は冷蔵庫から水を取り出すと大悟の隣に座ってテレビを共に見始めた。

「……なあ、大悟。一夏って……どうなると思う？」

「さてな？ まあ、女泣かせのままだろうな。あいつは………なんつうかよく言えば自分の信念を曲げない。悪く言えば、周りの空気を読むことができない。三つ子の魂何とやらという言葉があるのはそれが実際に確認されているからだぞ？」

要するに一夏の鈍感などは許容できるレベルに落ちることはあって

も治ることはない和大悟は告げている。そして、弾もそれを分かっている。

「何つうか…前途多難だな」

「藁人形でも用意しときゃいいだろ。まあ、あの馬鹿のフォローは任せろ。俺は弄る」

「……俺も混ぜろ」

今回のことで完全に鈴の事を吹っ切った弾。そのため、一夏の恋愛事情を弄る事に決めたのだ。一夏にとっては誠に不幸な話である。

「……で？ 弁明を聞こうか？」

「ハツハ〜バ〜カ」

一夏が部屋に戻ってきたのは数時間後だったが、右頬に紅葉をつけて返ってきた。理由を聞けば鈴と話していたら思わずNGワードの『貧乳』を言ってしまったのだ。

「あのさあ？ 俺言ったよね？ 空気を読めと……何？ お前の頭は心太か？ それともゼリーか？」

「しーましえん」

「ブワハハハハハハ！ 馬鹿じゃ！ 馬鹿がおるー！」

弾にねちねちと説教されている一夏を腹を抱えて笑っている大悟。ある意味珍しい光景である。

「幾ら何でも『貧乳』はねえわ！ せめてちつぱ

しかし、大笑いしていた大悟が『貧乳』にカテゴライズされる言葉を口にした瞬間に扉から二つの影が飛び込んできた。一つは鈴、もう一つは簪だった。そして、その影は大笑いしていた大悟にパンチやキックを浴びせると再び扉から出て行った。残されたのは、モザ

イクを掛けなければならぬ状態に変化した大悟『だったもの』とその流れるような惨劇に啞然としている残り二人だった。

「……一夏。もう寝るか。明日、鈴に謝っておけよ？」

「おう！」

弾の元気な声に一夏も元気な声で返事をした。二人は、先程の惨劇を必死に忘れるために床に付いた。

「ぬ…… おおおお…… あ…… ああああ……」

暗闇の中で『何か』が呻いているが、弾と一夏は必死に眠りにつこうとしている。ついでに、「ゴキゴキ」とか「ミチミチ」とか音がしているが二人は耳を塞いでいる。何も聞こえない。何も聞こえないのだ。

「まったく……あの二人にも困ったもんだな。しっかりと鍛えている俺じゃなければ死んでいたぞ……あ、首が真後ろ向いてる」

何も聞こえないのだ。そう、何も聞こえないし何も見えないのだ。最近「なんかもうこいつ人のカテゴリから外れてんじゃないかね？」と思いはじめた親友の復活現場など二人は知らない。知らない。知らない。

ないのだ。

ちなみに、簪と鈴が殴りこんできたのはこんな理由だった。

鈴 さすがにやり過ぎたと思って、簪を誘って叩いた件を謝ろうとしたら大悟の「幾ら何でも貧乳はねえわ」発言が聞こえてブチ切れ

簪 鈴の付き添いで来たら大悟の「幾ら何でも貧乳はねえわ」発言を聞き「大悟は巨乳好き」姉さん好き？ 私に思わせぶりな行動をしていたのは『将を射んと欲すれば』的な思惑があった？」という式が成立し嫉妬で暴走。

要するに、大悟のタイミングが外れた発言のせいである。普段は一夏を弄つたりノリで行動しているしわ寄せが今来ているのだから。あんまり応えているようには見えないが。

「……ッ！ 大ちゃんがかんちゃんを怒らせた気がするよ！」

「……寝てください。というか、一々五月蠹いです」

どごそのシスコン姉が従者のメガネ美人にそんなことを言われていた。

第12話 男の青春？〜弾と一夏の喧嘩後編〜（後書き）

一夏は残り二人の影響で「空気を読もうとするけどツメが甘い  
結果として読めていない」という感じにしようと思っています。ま  
あ、少しずつ変化していくと思います。

次回は、ゴーレム乱入編ですかね？ 三馬鹿の合体技が見れるかも  
？

第13話 いわゆるひとつの中ボス戦〜ゴーレム？の顔は胴体だと思っていた〜

「どりゃあー！」

「甘いぞ一夏！」

アリーナではISを使用しての大悟と一夏の模擬戦が行われていた。一応は授業の一環でくじ引きの結果、この組み合わせになった。

「『玄武剛弾』！」

「ロケットパンチかよ！ だけど、それだけなら！」

回転して小規模の竜巻を作り出しながら撃ち出された右腕を雪片で斬り払いながら距離を詰めるが、ソウルゲインの左手から発射された『青竜燐』でバランスを崩すと後ろからやってきた『玄武剛弾』の不意打ちを受ける。

「操作できるのか！？」

「まさか。今のは偶然だよ。誘導性は持っているが撃ち出した腕を回収するためのものだからムリムリ」

右腕を回収して感触を確かめながら一夏の質問に答えていたのだが、ふと気になったことを話してみた。

「そういえば、ヴァイサーガの武装ってあと一振り刀があった。なんで、それ使わないんだ？」

ヴァイサーガの仕様書には『雪片式型』ともう一振り『五大剣』と銘が彫られた刀があったはず。しかし、一夏はそれを使おうとはしていない。それを不審に思ったのだが、一夏は使おうと思っても口ツクが掛かっているようで使えないという。

「なんか特別な条件でもあるのかな？」

「さあ？ あれだろ…RPGとかで一定以上のレベルがないと使えない技とかだろ」

大悟はそう返したが、内心は困惑していた。あの狂人の兄が一口ツクを掛けるようなまねをするはずがないと思っているから。

「（まあ、考えても仕方ないか）」

ロックが掛かっている以上は使えないのだから、考える以上無駄と大悟は考えて模擬戦を続行した。結果とするなら、引き分けになった。理由としては千冬によりソウルゲインの『エネルギー吸収変換装置』の許可なしの使用ができなかったことなどがあげられる。そもそもソウルゲインはその『エネルギー吸収変換装置』の使用を前提として作られているらしいので結構キツイようだが、そこは頑丈さに定評があるらしい大悟。

「エネルギー兵器が少ない？　なら素手で殴ればいいじゃない」

という持論で突き進んでいる。自分の被害を考えない特攻戦術は相手にある種の恐怖を与えているようで、現在一組の勝率トップをキープしている。

ちなみに、一夏は可もなく不可もなくな勝率。ヴァイサーガに搭載されているトレスシステムにより助けられている部分もあるが本人の資質とヴァイサーガの運用コンセプトが合致しているようで初心者ながらもそこそこの力量を発揮している。

弾は勝率では低いほうだが、これは懐に入り込まれた場合のためその前に決着を付けている場合もある。というか、勝っている試合は大半がそれである。近接戦闘は本当にチンピラレベルである。だって、篝相手にフルボッコにされていたから。

「先生……格闘戦がうまくなりたいです」

「……とりあえず、一夏レベルの人間と組み手をしておけ」

泣きながらうづくまる弾に優しく声をかける千冬がいたとかいなかったとか。

そんな感じでトーナメント戦当日になったのだが、初戦の対戦カードが一夏と鈴という誰かが仕組んだのではないかというほどの組み合わせになっていた。

「ずっと思っていたんだけどな？ 一夏って恋愛に興味がないんじゃないかって、俺と同じようにバトルジャンキー的な思考をしているから色恋沙汰に鈍感だと思っただ」

「あゝ……なんか納得出来る」

「それはどういう意味だ？」

「確かに、私との試合でも戦っていることが嬉しそうでしたわ」

「……ハムハム」

観客席でそんな会話を交わしている大悟たち五人。五人の目線の先には、トーナメント戦第一試合の対戦が行われていた。戦っているのは、一夏と鈴。そして、一夏は実際のびのびと戦っている。大悟の言葉もある意味当たっているようである。ちなみに、簪は弾の作ったおにぎりを食べている。

「あいつは一つのこと熱中すると他が疎かになる性格だ。これまでの言動がそれを証明している」

大悟は珍しく真面目な顔でそう評した。それにちよつと顔を赤らめる周囲の女子。それに気づいていないのか突如大悟は立ち上がった。

「だがしかし……衝撃砲とか面白いモンと戦えて羨ましいわあ！俺にも戦わせろお！」

「あ、こいつも大概だから」

今にも飛び出していきそうな大悟を抑えながら弾は眉間を抑える。実を言うならば、大悟が言っていた言葉はそのままブーメランの如く大悟に返ってくる。まあ、それでもある程度空気が読めて惚れている女性がいるぶん一夏よりはマシなのかも知れないが。

「しかし…その、大悟たちは一夏をどうやって鍛えたんだ？ 衝撃砲は見えないはず。なのに、一夏は普通に受け流しているような気がするんだが」

アリーナの中では鈴が撃っていると思われる衝撃砲を雪片式型で受け流しているような行動をとっている一夏がいた。衝撃砲はその名のとおり『衝撃を砲弾として撃ち出す武器』である。無色な衝撃を見きれるのは普通無理だと思うのだが。

「ハイパーセンサーで強化されているし……まあ、一夏自身が勘で避けている部分があると思う」

それに衝撃砲は衝撃が空中を移動する際に塵気楼のように若干空間が揺らいでいる。視力に自信のあるものがいれば見きれなくもない。

「ちなみに、大悟さんたちはあれをどうやって攻略します？」

セシリアはそう言うが、実際のところ衝撃砲はISに慣れているものなら楽に攻略できる。それに、衝撃砲を防ぐ手段はそれこそ大量にあるのだ。現に弾は衝撃砲を強固な装甲で防御しながら狙撃という手段で攻略すると言っている。

「セシリアちゃんと俺は同じ射撃重視とはいえタイプが全く違うからな」

実弾特化の弾と光学兵器特化のセシリア。そのため戦闘スタイルも若干異なっている。まあ、それはそれで互いの力を高める事にもなる。現に、弾とセシリアは結構な頻度で射撃について語り合っている。一夏をどうやって落とせばいいか相談もしているのだが。

「じゃあ、大悟はどうやるのだ？」

「は？　んなもん、近づいて殴り飛ばしやあ終わりだろ」

そして大悟は相変わらずの答えである。衝撃砲はどうするのかをもう一度聞くと「要するに見えないパンチを受けているようなものだから一々気にしない」とのこと。どうも大悟は感性が若干違うようである。

「ところでクッキー。おりむーに関してこんな噂が広まっているんだよ」

いつの間にか居た本音が見せた学内生徒用の掲示板。いわゆる「2ちゃん」的なものである。その「学園に男子がやってきた」という板にこんなスレが立っていた。

【学園の公式試合で好成绩を収めたら織斑一夏、九鬼大悟、五反田弾と付き合えるらしい】

「……いや、こんな噂は流していないなあ」

「待て。それ以外なら流していたのか？」

ちなみに、大悟が流した噂は『織斑一夏が特訓相手をさがしている』というもの。筈などが怒っていたが、大悟の意見は「違う人間と戦ったほうが経験値は積める」というもの。

「というか、一夏に惚れる人間が増えるのが不安ならさっさと告白なり何なりしろや。あの唐変木は面と向かって「愛している。私と結婚を前提に交際してくれ」と言わん限り無理だぞ？」

さすがに、「付き合っつて「ショッピングの同伴」と何故か変換される一夏の不思議脳内でもそこまでいけば自覚するだろう。ただ、それを目の前の妙なツンデレ娘たちにできるかが問題だが。

「しかし…ん？」

「……どうしたの大悟？」

試合も盛り上がっていたときに大悟が辺りをキョロキョロと見渡し始めた。簪が問いかけると眉をひそめながら口を開いた。

「いや、なんか……変な音が。風を裂く音っていうのか？ そんな音が聞こえているんだが」

何気に聴覚と視覚が人並み以上の大悟。その音の正体を探しているのだが姿は見えない。ふと空を見上げると『それは落ちてきた。』

「やるわね」

「お前こそ…衝撃砲っていうのは最初はびっくりしたけどなんともなるもんだな！」

「……あんた思考が大悟に影響されてない？」

大悟のようにバトルジャンキーな感じの一夏を見ながら鈴は大きく息を吐くが、鈴自身もそのような気質が若干あるためこの状況を楽しんでる。そして、二人が笑い合って決着をつけようとしたときに乱入者が現れた。

「なんだあー!？」

「IS…!？」

それは黒色のゴリラのようなIS。そのISは呆けている一夏たちに向かってビーム砲を発射した。

「うお!?!？」

「一夏！」

なんとか避けられた一夏だったが、いまのはヴァイサーガの『イメージトレースシステム』のおかげだった。しかも、ヴァイサーガがあああのビームは危険であると伝えていた。そしてそれが事実だということを知り返って自覚した。

「……遮断シールドをぶち抜くって……どんだけだよ」

振り返った先には遮断シールドを突き破り観客席を抉ったビームの爪あとが残されていた。幸いにも、だれもない場所だったがもし生徒が座っている場所だとするならば。

「鈴！ 一時休戦だ！ アイツを倒すぞ！」

「え！？ で、でも教員の介入を『鈴！ 俺だ！ コンピューターがハッキングを受けているらしい！ 教員の手助けどころか俺達も避難できなくなっている！』嘘！？」

オープンチャンネルで大悟から知らされたのは援護は期待できない。それどころか、観客席にいる生徒たちも危険な状態であるということ。幸い、大悟と弾が女子生徒たちに指示を飛ばしているし、二人

ともISを展開しているため、最悪にはならないだろう。

「鈴…やるぞ！」

「あゝもう！ わかったわよ！」

互いにエネルギーは心もとないが、ハッキングを撃退して教員たちが助けに来るまで防御に徹するという作戦で動き始めた。そうすればなんとか持つだろう。

「クソ…こいつ、動きを予測してやがる！」

「いくらなんでも有り得ないでしょ！ ISがどれだけすごくても扱うのは人間よ！」

黒いISは一夏たちの動きを予知しているかのように攻撃を仕掛けてくる。そもそもまともに戦うつもりはないのだが、どうもこちらを挑発しているように思える。そのおかげで直情的な鈴は結構いらついている。一夏は大悟に弄られていたおかげである程度は沸点が高いのが幸いしていた。

「鈴！ 焦るなって！」

「わかってるわよ！」

二人とも援護がないという状況で磨耗し始めている。そもそもが、二人はまだ少年と少女。このような状況では焦り、ストレスが溜まるのも仕方がない。しかし、敵はそれを知ってか知らずか嫌らしい攻撃をやめない。そのような防御一辺倒の状況がどれくらい続いただろうか。ある意味この状況を変化させる事態が起こった。

『一夏！ そのような相手に何をしている！』

拡声器を使ったのかアリーナに響いた叫び。声のする方には箒が立っていた。この状況を憂いた結果の行動だろう。だが、この状況では明らかにやってはいけない行動だった。黒いISは目らしき部分を光らせると箒の方を向いた。一夏は直感で感じた。これは『ロボット』だということに。

「箒、逃げる！ こいつは無人机だ！」

「えっ？」

一夏の叫びと同時に箒に向かって遮断シールドを撃ち破ったあのビームが発射された。一夏はヴァイサーガを飛ばすが間に合わない。箒もまさか自分を狙ってくるとは思っていなかったのか、それとも

一夏の無人機発言に驚いたのか固まっている。

「第！」

「先輩！」

「織斑先生！」

管制室にいた真耶やハッキングの報を受けて無理やり侵入してきた布仏虚が千冬に声をかける。千冬も思わず動くが虚と共に侵入してきた楯無にやんわりと止められる。

「更識！」

「落ちついてください。大丈夫ですよ。ここに『誰が』いるかお忘れですか？」

楯無は静かに扇子でモニターを指した。そこには二人の男がいた。

楯無は微笑むと扇子を開いた。そこには『出勤』と書かれていた。

「どっせえええい！」

「だ、大悟？」

遮断シールドを撃ち破って箒を飲み込もうとしていたビームは青い巨人により無力化された。

「チツ…吸収するしかねえか…弾！ 箒ちゃんを頼む！」

「はいはい。悪いけど、しっかり掴まっけていてくれよ？」

「だ、弾　　うわぁ！？」

照射されているビームを吸収している大悟の指示を受けてレーザーアングリフを纏った弾が呆けている筈を抱えてそのままホバーで他の生徒がいる場所に連れていった。ソウルゲインはその機能を持ってビームを吸収しているが。

「フハハハハ！ このまま進んでいけばアリーナ内に侵入……あ、持たねえ」

ビームを吸収しきれなかったため、それを後ろに受け流した大悟はそのまま遮断シールドに両手を接触された。

「弾……今だ。ぶち抜け！」

そして、戻ってきた弾は大悟が触れている部分の遮断シールドに向かい一斉射撃を浴びせた。

「……よし！ オラア！ 俺と弾が来たぞ！」

そして、そのままアリーナに入り込んだ大悟と弾は一夏たちの下へと走る。

「よっしゃあ！ 反撃開始だ……行くぜ野郎ども！」

「アタシは野郎じゃないわよ」

「一夏、エネルギーは大丈夫か？」

「うん。まあ、大丈夫だ」

さあ、反撃開始。

第13話 いわゆるひとつの中ボス戦「ゴーレム」の顔は胴体だと思っていた

やっと続きです。最近、リアルが忙しいので書く暇もないです……。

今回は、まあ一夏たちとゴーレムの戦いですね。

以前、投稿してた「IS×テツカマンブレード」を再掲して欲しいというご意見を頂いたので改訂版を投稿します。といっても……全ての投稿作品が亀更新になります。そろそろ就活の準備もしないと……

## 第14話 合体攻撃はロマン(理想としてはGガン×マスター)

「とにかく、さっさと潰すか援軍が来るまで待つ。これしか無いだろ」

大悟が体をほぐしながらそう告げる。遮断シールドをソウルゲインの機能で無理やり押し通ってきた青年は今にも敵に跳びかかりそうだ。

「まあ…それしか無いな。鈴、お前はこっちに来い。ラーズアングリフの背部ランチに乗れば動けるだろ」

もう一人、無理やりアリーナの中に入り込んだ青年はデータを確認しながらエネルギーが心もとない鈴を背負おうとしている。ラーズアングリフは通常のISよりも二回りほど大きい。内臓兵器やエネルギー補給装置などの影響である。ちなみに、ソウルゲインは通常のISより一回りほど大きい。

そして、ラーズアングリフの背部には他のIS運搬用のランチがあり、そこにエネルギーが心もとない鈴を乗せて戦うつもりらしい。

「とりあえず、俺が足止めをする。お前ら二人は近接戦で倒せ。鈴

「は俺の合図で衝撃砲を発射してくれ」

両手に二連装ガトリング砲を取り付けた弾は作戦を立て始めた。意外にも三馬鹿の参謀だった弾。

「よしっ！ 行くぞ一夏！」

「OK！」

そして、大悟たちもそれに従う。基本的な作戦は弾を立てて、それを状況に応じて大悟が組み替え、一夏はそのフォロー。初めて会った時から創り上げてきたフォーメーション。

「行くぞオラア！」

「ヨッシャー！」

空を駆ける群青の拳闘士と白の鎧武者。近づいてきた二機を迎撃するために動き始めたアンノウン。しかし、その動きは雨のように降り注ぐ槍の如きミサイルに止められる。

「『ファランクスミサイル』は成功したか…鈴！ 今から送るデー

「夕の通りに撃ってくれ」

「任せなさい！」

朱の重戦車が背中に龍を乗せ、砂埃と共に弾幕を張る。アンノウンはラーズアングリフを補足しようとするが、砂埃と共にチャフがばらまかれているので大まかな位置しか分からない。さらに、ジグザグと動くため余計に補足が難しい。

「大悟！ 止めは一夏に刺させる！ 時間がないから零落白夜で一気に決めたほうがいい！」

『ああ！？ 俺にもやらせ…いや一夏！ 合体技だ！』

『なにそれ！？』

「勝手なこと…いや、有効かもしれないな。ただし、相手に体勢を整える時間を与えるな！」

『任せとけ！』

通信をつなげながら作戦を組み替える三人。鈴は少し面白くなさそ

う。

「あたしだけノケモノにすんなー！」

「うわっ！？ 暴れんな！」

「何をしているんだあいつらは……」

通信はオープンチャンネルらしく会話の内容が普通に全員に聞こえる。それでも。

「うわぁ………凄いです」

アンノウンが一夏に迫ればそれを牽制するかのごとく銃弾が飛んできて、大悟が懐に入り込んで攻撃を仕掛ければ一夏が追撃を仕掛ける。

「あの三人は中学時代から三人で喧嘩をしていたらしい。だから、チームワークは抜群だ」

「そういえば、だいちゃんは『任務に行くなら簪と、喧嘩をするなら一夏と弾』って言っていましたね」

ニコニコと戦闘を見ている楯無はそう言った。千冬は内心面白くない。楯無はいつもこうやって飄々としている。たまにはこいつの慌てた姿を見たいとも思っている。

「更識。お前は九鬼が心配じゃないのか？」

モニターにはアンノウンに殴り飛ばされてアリーナの壁に突っ込んだソウルゲインが映っている。しかし、楯無が開いた扇子には『心配ご無用』と書かれている。

「だいちゃんはあれくらいじゃ倒れませんよ。仮にもだいちゃんは『更識楯無』の婚約者候補ですから」

「……………」

「……………」

「ん？」

自信満々にそう宣言した楯無だったが、突如聞こえた声に固まった。千冬が振り向くとそこにはジト目で楯無を見ている簪がいた。

「……………」手伝いに来ました」

「あ、ああ。じゃあ布仏の支持に従ってくれ」

なにやら瘴気を纏っている簪に驚きながらも支持を出す千冬。簪も『更識』で活動している。ならば問題はないと判断したのだが、楯無が固まっている。

「か、かんちゃん…あのね？」「姉さん」「は、はい…」

「……………」負けない」

「え？ あ、かんちゃん？ ちょっと待ってえ！」

振り向かずに告げた言葉。千冬は大体の想像はついたが、楯無は狼狽しきっている。

「（ふむ。こいつの弱点は妹か）」

そうは思ったが、自分も弟が弱点なので多分なにも弄ることはないだろう。

「って、そんなことより先輩！ あれ！」

真耶がモニターを指し示すと。

「イイイイイヤツハアアアアア！」

ソウルゲインの両腕を回転させながらアンノウンの拳を浴びせる大悟。そのままアンノウンを抱くと地面に向かい急降下しはじめた。

「モズ落としてかあ！？ 弾！」

「はいはい。鈴。今から『大悟に向かって』砲撃開始だ」

「了解……え？」

地面に叩きつけたアンノウンの頭部を掴んで再び飛び上がり、こっちに突貫してくる大悟に向かい容赦なくガトリングやミサイルを浴びせる弾。そして、仕上げとして右背部から取り出した大砲。

「『フォールディングソリッドカノン』セットアップ。アンカーセ  
ット」

大悟の攻撃や弾の砲撃でもそこまで傷ついていないアンノウンが近づいてくる。脚部から射出したアンカーで機体を固定した弾はそのままアンノウンに照準を合わせた。

「一夏！ 撃ち上げるぞ！」

『よし……零落白夜発動準備OK……いつでもいいぜ！』

「大悟！」

「任せろ！ オラアアアア！」

掴んでいた右手のエネルギー吸収システムを発動させ、エネルギーを一気に奪い取る大悟はそのまま弾に突撃していった。

「……避ける！」

そして、丁度ラズアングリフとアンノウンが1Mの距離になったとき、ソウルゲインは掴んでいた頭部を離し、そのまま真横に跳ぶ。残されたアンノウンは何かを感じ取り動こうとするが、それよりも早くラズアングリフが動いた。

「『フォールディングソリッドカノン』……発射！」

大口径のカノンから発射された弾丸はアンノウンを真芯に捉え、そ

のままアンノウンを撃ち上げる。その先には。

「さすが弾。俺がいるところにぴったりと撃ってくれるなあ」

雪片式型を居合の型で構えている一夏がいた。

「……ヴァイサーガ、ブーストオン！」

一瞬で速度を上げたヴァイサーガはこちらに飛んで来るアンノウンとすれ違った。しかし、そのすれ違う瞬間に零落白夜を発動させた雪片式型でその胴体を斬り裂いた。

「よし！『バカヤロウ！ こっちくんなあ！』え？」

加速を止めなかった一夏。その先には壁にめり込んでいるソウルゲインが。

呆然としている一夏＋身動きがとれない大悟＋このままだとぶつか  
るよ？＝???

「「みぎやあああああ！」」

「あのバカども」

ヴァイサーガがソウルゲインと思い切りぶつかりISは強制解除。  
一夏は目を回し、大悟は首だけ壁にめり込むという結果になった。

「大丈夫ですよ!？」

ハッキングを解除したらしく、セシリアたちが走ってきたのだがこの現状を見て固まった。

「……大悟。大丈夫？」

「……ッ……ッ！」

必死に壁に両手足をついて頭を抜こうとしている大悟に近づいた簪。  
はたから見る分には結構面白い状態である。

「……はあ」

千冬は結果として何もなかったが今回の事件の処理を考えて憂鬱な気分になった。

IS学園上空に一機のISがいた。それはソウルゲインとヴァイサーガを合わせたような外見の黒と群青のIS。

「…………束。ゴーレムの活動停止を確認した…………ああ。一夏も問題はなさそうだ。ああ。これより帰還する」

ISは眼下に見える一夏たちを暫く見下ろすとその姿を消した。まるで風景に溶け込むように。

第14話 合体攻撃はロマン〜理想としてはGガン×マスター〜（後書き）

ということで、合体攻撃で仕留めました。イメージはランページゴースト×斬艦刀逸騎刀閃でしょうか？

最後が締まらないのもお約束ですね。

そして、最後の最後に現れたIS。一体何者なんだ？（棒

第15話 怪我は男の勲章でも、ギャグではむしるガジェット

「……怪我は男の勲章とは良く言っが無茶ばかりするな」

千冬はそう言っってベッドに座る一夏を見る。一夏は居心地悪そうにしているが、千冬の言葉を聞いている。周りには箒たちがいる。

「だが……壁に思い切り頭をめり込ませてもピンピンしている者もいるがな」

「……ですよねー」「」「」

「……ん？」

千冬の視線の先にはカップ麺を食べている頭に包帯こそ巻いているが『普通に動き回っている』大悟がいた。ちなみに、大悟がめり込んだ壁はそれこそぞの銀行の金庫以上の堅牢さを誇っているのだが、そこにぶつかってめり込み尚且つ頭に包帯を巻くだけですんでいるこの男は…。

「しかし、なんか首の調子が悪い。あれだ。寝違えた時みたいな」

「……………湿布いる？」

『普通は』死ぬ状況で生き残っておきながら寝違えと一緒にする大悟に呆れながらも、それを気にせず湿布を手渡す簪に絶句した。そりゃもう千冬も真耶も。

「かんちゃんて、昔からだいちゃんと一緒に居たからね。多分わかってるんだろうなー」

「るる〜」とたそがれている楯無の言葉。要するに簪は慣れている。

「あの……………どちら様ですか？」

「あ、お姉さんはあれだよ。この学園の生徒会長さ。ついでに、簪ちゃんのお姉ちゃんだよ」

いつの間にか紛れ込んでいた楯無は自己紹介をすると再び「るる〜」と涙を流し始めた。どうやら先ほどの簪の言葉を引きずっているようである。

「まったく、壁の修理は自費だぞ？ 修理なんて無理だぞ？ とり

あえず、セメントを持ってきてくれないと」

「そうよ！ ていうか弾！ アンタ、セメントがあれば修理できるの！？」

そして、その一方で弾と鈴はもはや『こいつはそういう奴』と割り切っている。案外、そう考えたほうが精神衛生上いいのかもしれない。そして弾の言葉に鈴は驚いていた。

IS学園に乱入してきたIS。装甲などは一夏たちの攻撃でボロボロだったが、コアは無事だった。しかし、そのコアを調べてみると驚くべき事実が分かった。

「登録されていないコア、ねえ。なあんかきな臭くなってきたよ  
うな気がするな」

「……九鬼。なんで貴様がここにいる？」

千冬は大悟を睨みつける。千冬がいる場所はIS学園でも限られたものしか入ることのできない地下室。そこにアンノウンISを持ち込んで真耶やその他の職員と解析を行っていたのだが、ここに大悟が現れるのは予想外だった。

「今は『生徒』じゃなくて『更識』なんですよね。ああ、面倒」

どうやら楯無からの命令でここにいるようである。

「まあ、それに……もしこれが篠ノ之博士の仕業だとしたら確実にウチのクソ兄貴も関係しているだろうし？」

「そういえばそうだな。だからお前が来たと？」

「そうですね。つーか、多分あのクソ兄貴は絶対噛んでますよ。何だかんだで篠ノ之博士と波長合つてしょ？」

「……そう、だな」

波長が合つどころか時折同一人物ではないかと思うほど似ている――

人。違うところを挙げるとすれば性別ぐらいか？

「いや、クソ兄貴のほうが他人を認識して行動している分たちが悪いですよ？」

束は限られた人間しか認識しない。だから、周りもどのような思惑があるうとも一応は諦めも付くだろう。だが、堅悟は自分に向けられる期待なども含めて利用する。

「とりあえず、篠ノ之束の関与が疑われるという事を報告します」

「ああ。それと…お前もいくら体が頑丈だからといっても、それがお前の強さを支えているとは言え無茶はするな。お前が傷つけばそれだけ心配する者もいるんだ」

「……善処しま「確約しろ」…あい」

千冬は呆れながらも部屋を出て行く大悟を見ていた。馬鹿というか熱血というか大悟の行動には昔から胃痛を引き起こすものばかりだった。でも、そのおかげで一夏は寂しさを紛らわすこともできたし、誘拐事件の後のケアもしてくれた。

「三人で喧嘩などをしていたときはどうしたものかと思っていたが

…頭ごなしに否定するものでもないのかもな」

「男の子ってそんなものですよ」

隣にいた真耶もニコニコしながら口を開く。確かに、そんなものかも知れない。

「ウォーズが出るぞ」。母ちゃんたちには内緒だぞ」と

「なにそれ？」

「ゲームのCMだ」

アリーナをそれぞれのISを展開してランニングをしている三馬鹿。動作補助システムを切っているためかなり重いはずなのだが、なん

とか動かしている。ちなみにこれは自主練習と一夏のリハビリ替わりである。アリーナでは普通に他の生徒が授業をつけている。

「もっと楽しい感じにしてくれよ」

「じゃあ、昭和枯れすす？」

「お前は鬱にしたいのか？」

「んじゃあ……森田童子？」

「だからね……？」

「……全く分からねえ」

そんな会話をしながらもペースは落ちていない辺り三馬鹿の基礎体力が分かる。そしてひと通り走った後は、三人で隅のほうにて太極拳の真似事。

「き、きつい」

「まあ、ゆつくりと体を動かすのはなあ……」

一夏と弾は結構きつそうではあるが、大悟は普通に動かしている。それでも出来ている辺りは一夏と弾もなかなかだろう。

「どうよ一夏。大分動かせるようになったんじゃないか？」

「そうだなあ……結構慣れてきたかも。まあ、まだ千冬姉たちには敵わないけど」

「そりゃそうだよ」

三馬鹿は三人で千冬に立ち向かえば勝てる。だが、個人戦を挑むと負ける。弾は懐に入り込まれたら負けるし、一夏も同様。一番いい勝負をするのは大悟だろうが、以前呐喊したら逆にホームランされたこともある。

「打倒織斑千冬！俺をホームランして女子風呂に叩き込んだ恨みは忘れん！」

「……ああ、あの日の騒動ってそれが」

鈴が転校してくる数日前に大悟が女子風呂に乱入したという噂が立ったのだ。まあ、一人で作業着にタオルを頭に巻いて風呂場を修理していたからなのだが。その原因が先ほど言った千冬にホームランされた結果なのだろう。

「あれ？ でも、遮断シールドが張られているんじゃない？」

一夏の疑問も尤もなのだが、ソウルゲインには遮断シールドに干渉できるあのシステムがある。恐らくそれが誤作動したのだろう。

「忘れんぞ……途中で楽しくなつてライオンの口からお湯が出るやつを設置したり、ジャグジーを設置してしまった恨みは！」

「それ恨み言か？ というか、それって自業自得だろ」

「まあな。しかもライオンのやつは自作らしい」

意外にも手先が器用なため日曜大工が得意な大悟。そして、魔改造が好きな大悟。かつては中学の校長の銅像を不審者撃退用銅像型迎撃兵器に改造したこともあった。ちなみにその銅像は今も中学校で元気に不審者を撃退している。

「……あいつ整備士の方がよかつたんじゃない？」

「一夏。お前は腕からドリルを生やしたいのか？ 目からビームを出したいか？」

「嫌です」

そもそも大悟が大怪我するのはある意味で血の気を抜いているためでもある。それで色々溜まっているものを発散している。もし、整備士になっていたら大怪我で発散できなかったものはどこに向かうか。恐らく武装や改造に向かうだろう

「あいつ碌な事起こさないな」

「……」

方向性は違うが一夏も碌な事起こさないだろうと思ったが、弾は空気が読めるので何も言わなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3418w/>

---

IS インフィニット・ストラトス～三匹が行く～

2011年10月30日09時04分発行